はじめに

われわれの筑波大学社会科教育学会も，発足以来６年を経過し，機関誌『筑波社会科研究』も，本年２月には第６号の発行をみた。その間つねに学会としての内容充実に努め，年３回の例会と２月に行われる年次大会についても常に工夫を加えてきた。

本冊子は，1987年２月11日の年次大会において行われたシンポジウムの記録である。

昭和61年度のばあいには，当初，例会の共通の研究テーマとして，「社会諸科学と社会科研究」を掲げ，主として高等学校における社会科教育とその背景にある学問研究との相互関連について検討を試みることにしたのであった。

ところが９月例会の前後から，高校における「世界史離れ」がマスコミでとり上げられるようになり，更に10月20日に発表された教育課程審議会の中間まとめでは，「現代社会」が必修からはずされ，選択制による案が示されたのであった。また小学校低学年では，社会科をなくし，新たに「生活科」を設ける案となっていた。こうした動きに対して，日本社会科教育学会ではすでに５月，８月，10月の３回にわたって要望書を提出していたのであって，社会科教育関係者にとっては，黙視できない重大な危機到来という認識があったのである。

本学会幹事会でも，そうした状況の下で，当初の予定を変更し，11月の例会テーマは「社会科教育の当面する諸問題－教課審中間まとめをめぐって－」としたところ，31名という多数の出席を得て，熱心な討議が行われたのであった。そこで２月11日の年次大会においても，「社会科教育の当面する諸問題」というテーマのシンポジウムを行って，この問題をさらに掘り下げて検討しようということになった。検討資料として，会員に対するアンケートを出しその集計結果も発表することとし，急拠準備備を進めることにしたのであった。

シンポジウム終了後３月の学内幹事会で，この内容は，「現代社会」についての歴史の証言にもなることゆえ，印刷物にして残したい，という意見が出され，実現に向かって努力することとなった。

記録テープおこしは，４月新入の諸君に担当して貰い，経理面では教育研究科にも協力して貰えることとなり，ここに立派な記録冊子ができるようになったのである。本学会の研究の歩みの一里塚となることを願うものである。なお，当日配布された資料を掲載できなかったために，一部内容が理解しにくい報告もあることを，予めお断りし，お詫びしておきたい。

1987年11月10日　会長　横山十四男

【谷川】　長らくお待たせ致しました。これからシンポジウム「社会科教育の当面する諸問題」を開催させていただきます。私は筑波大学教育学系の谷川と申します。よろしくお願い致します。

早速ですが，吉田先生から総括提案をお願い致します。

I．総　括　提　案

吉　田　　寅（筑波大学歴史人類学系）

【吉田】　昨年度から今年度にかけて，教育改革の激しい動きが起こっております。その中でも特に重要なことは，10月20日，教育課程審議会の中間まとめが出たことでございます。これには大きく四本の柱がございます。その第一は，豊かな心を持ち，たくましく生きる人間の育成をはかること。第二は，自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること。第三に，国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し，個性を生かす教育の充実をはかること。第四に，国際理解を深め，我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視することがあげられます。この中間まとめは，昨年四月の臨時教育審議会第二次答申を踏まえておりまして，この基調を見てまいりますと，まず大きく二つのことに気が付きます。

第一は中学校段階における選択履修の幅が拡大する方向になっております。第二に，中学校における習熟度別指導が導入されております。第三に，特に社会科に関連して注目すべきことは三つになると思います。一番目は，小学校低学年における「生活科」の設定でございます。二番目は，小・中・高を通じて公民的分野に関する内容の精選。三番目が高等学校「現代社会」の選択科目への移行です。この三つが社会科に関して特に注目すべきことでございますので，この三つについて述べてみたいと思います。

まず一番目に「生活科」の設定の問題点でございますが，この週３時間という時間数の中で，体験的な学習を重視する生活科のねらいというものが一体達成できるかどうか。この問題が第一でございます。二番目に，三年からの社会科との連続性をどのように保つか。これが第二点でございます。三番目に社会科と理科のみを総合する根拠がどのようなものであるかということです。

これはおそらく，理科の方においても同じような問題が出ていると思いますが，社会科と理科とを総合する根拠が必ずしも十分に示されておりません。このような問題を生活科の設定の問題については申し上げたいと思います。

二番目に，公民的分野の問題でございますが，選択履修の拡大に伴う時間数の削減が当然出てるわけでございますが，こうしますと，教材構造が大きく変化するのではないかということです。また公民的分野では公民的資質の育成という理念及び課題が一体今度のようになった場合，今までのように守ることができるかどうかということです。公民的分野の問題に関してはこのようなことが考えられます。

三番目は，高等学校の「現代社会」の問題でございます。まず第一に，高等学校の「現代社会」の問題に関しましては，必修をはずして選択に移すと簡単に言いますけれども，一体，現在の教育の現場において先生方が，必死に，前向きに取り組んでいる必修の「現代社会」についての総括反省がきちんと行われたかどうかということです。要するに，選択に移すならばその根拠は一体どこにあるのかということをはっきりさせるべきであると思います。第二に，中学校の公民的分野の時間が削減されることによって，「現代社会」の役割はますます増大してゆくのではないかということです。第三は「現代社会」の留意点の一つでございますが，「現代社会」の内容に，人間としての生き方の充実を強調するのは結構でございますが，これを強調しすぎると，道徳教育的な傾向が増大するのでないかということです。これがやはり問題として，取り上げられなければならないかと存じます。

教育課程審議会の中間まとめにつきましては，以上の三点，一番目は，小学校低学年における「生活科」の設定の問題。二番目は，小・中・高を通じての公民的分野に関する内容の精選の問題。三番目が，高等学校「現代社会」の，選択科目への移行の問題でございます。

次に昨年度の４月ごろからいろいろと問題になっております，歴史教育の問題について，若干触れてみたいと思います。昨年の６月以降，高校の歴史教育に関する問題が，教育界だけではなく，さまざまな問題となってマスコミにも現れております。まず一番目は，歴史科独立の動きでございます。これを主張する方は人文科学の要素が濃い歴史を，地理とか，あるいは社会科学である「政治・経済」と同一教科に扱うことには問題がある，という主張をしておられます。また，社会科という枠があるために社会経済史に偏りがちな現在の「歴史」を，文化史・精神史を重んずる，本来の歴史の姿に戻すべきだという主張がされております。二番目に，高校生の世界史離れの問題でございます。これは，戦前・戦中の鎖国的時代においても東洋史・西洋史は一応「外国史」という形で必修でございましたが，現在では全国で40％近い高校生が世界史と無縁になっているという問題の指摘でございます。三番目に，復古調日本史教科書が登場いたしました。こ

れは「日本を守る国民会議」によって編集されたものでございますが，一つの外交問題にも発展する事態が起こっております。しかもこの教科書は第一年度において8300部が採択されました。日本史の教科書は全体が130万でございますから，１％にはなっておりませんけれど，歴史教育の動きとして，注目すべき問題であるのではないかと思います。この三点でございます。

このような動きに照らしまして，社会科教育に関する要望書がいくつかのところから出ております。例えば日本社会科教育学会，全国社会科教育学会，それから全国歴史教育研究協議会あるいは歴史教育者協議会などから要望書が出ておりますけれど，これらの要望について，大きく四点にまとめて申しあげてみたいと思います。

第一は，社会科教育の根本理念は，民主主義社会を支える望ましい社会人の育成であることを，もういっぺんきちんと想起しなければいけないということです。二番目は，我々が生活する社会の理解，あるいは民主的態度の育成を，生徒の発達段階に即して継続的発展的に行われなければならないということです。それ故に，社会科は小・中・高それぞれの段階において必要であります。ですから「生活科」の問題にしても，歴史科独立の問題にしてもこの点から考えるべきであります。三番目における公民教育的課題の軽視につながるものだけではございません。もう一つは，これが社会科の解体につながる危険性を伴っているということです。また，社会科は小・中・高それぞれの段階において必要であるという絶対的な認識の上に立ちますと，歴史科の独立ということは望ましいことではありません。四番目に，高等学校の必修科目でありました「現代社会」が選択性に移行する場合，どのような点に留意しなければならないかということです。現行の「現代社会」の反省の上に立ちまして，発展的にその成果を継承しなければいけないと思います。このあとすぐに，まず「現代社会」についての問題が出てまいりますが，先ほど申しました，「現代社会」に関する，三つの点，もう一度申しあげたいと思います。

第一は必修である現在の「現代社会」という科目の総括，反省，これが十分に行われていないということです。それが，突如として選択になったということについて考えてみることが必要です。第二は中学校の公民的分野の時間が削減されると，「現代社会」の必要性は，ますます増大するのではないかということです。第三は「現代社会」の内容に関しまして，改善し，さらによきものにしていかなくてはならない。こういう点があるわけでございます。このあと，次々とご提案がございますが，私は総括提案として以上のことを申しあげさせていただきます。

【谷川】　ありがとうございました。また吉田先生には後ほどお話いただくことにいたしまして，続きまして，私たちの大学の大学院の学生諸君が，かなり精力的に学会員対象のアンケートをしていただきましたので，報告していただきます。

Ⅱ.「現代社会」をめぐる諸状況

—— 学会員対象アンケートの集計報告 ——

岩　瀬　弘　一　(筑波大学大学院修士課程)
塚　原　直　人　(　　〃　　)
藤　沢　　健　(　　〃　　)
松　本　　康　(筑波大学大学院博士課程)

Ⅰ. 調査目的

この調査は，昨年の11月の例会のテーマである「社会科教育の当面する諸問題」をさらに発展させ，より具体化させるために行ったものです。先の例会では，教育課程審議会の「中間まとめ」による「現代社会」の選択制への移行の方向が問題になりましたが，今回の調査は，教育現場の実践家たちが，「現代社会」をどのように考え，どのように実践しているかを知り，今後の「現代社会」のあり方を考えるための資料にすることを目的としているものであります。

この実態調査は，昨年の12月から今年の１月にかけて学会員を対象にして行ったものでありましたが，学期末の多忙な時期とも重なり，発送数91に対して返送数33，回収率36.7％でありました。

Ⅱ. 調査結果

①. 履修形態について

「現代社会」の履修形態については，50％以上が教科書の内容に沿った授業でありましたが，「現代社会」を読み換えて，他の科目を置いている学校が12％ありました(Ｑ４)。例えば，「現社」２単位＋「世界史」２単位，あるいは，「倫理」＋「地理」で４単位，といったぐあいでありました。また，「現代社会」という名目で実質的には「倫理」と「政・経」を実施している学校も９％ありました。このように「現代社会」が必修科目でありながら名目的な存在になっている理由は，やはり入学試験や就職試験への対応のためであると思われます。受験体制の中で，「現代社会」のための４単位は，他の科目の単位不足を補完するために利用されている感を否めません。

もう一つ注目すべき点は，同一学校にあっても，「現代社会」に対する考え方，授業のやり方が担当教師により様々だということです。この点は後で述べる「教師の協力体制」とも関連してくるように思われます。

②. 授業内容及び評価について

授業内容については，学習指導要領の項目別に「教師の取り扱い」における重点のおき方と「生

徒の関心」の度合をクロスさせてみました(別表)。その結果，教師が重点をおき，生徒が関心を示す項目は，「人間と環境」，「人口問題と資源・エネルギー」，「現代青年の諸問題」といったところです。これらは我々が何となく「現代社会」的だと考えている項目であり，問題単元的に授業しやすいところであると思います。次に，教師は軽く扱うが，生徒が意外に関心を示す項目は，「世界の文化」，「日本の文化と伝統」，「現代の文化」，といったところです。これらの項目は，文化人類学とか民俗学的な教養が必要なところであり，教師側が力量をつけていきたいところであります。一方，教師は重点をおくけれども生徒の関心が低い項目は，「日本の経済の特徴と国際化」，「経済の調和ある発展と福祉実現」，「民主政治」，「国際平和」等のいわゆる公民的分野のようです。これは多分に中学校の公民的分野との重複に起因するかもしれませんが，教師側の授業展開の工夫が望まれるところでもあります。最後に，教師も軽く扱い，生徒も関心が低い項目は，「真理を求めて，思索することの意義」，「よく生きることと生きがいの追求」，「民主社会の倫理」といったところです。これらの倫理的内容については，教科書の記述の問題も含めて，高校1年という発展段階にどう対処していくかを検討していく必要があるのではないでしょうか。

表　教師の取り扱いと生徒の関心

Q5-3,4 / Q5-1,2		生徒の関心		
		関心強い	どちらともいえない	関心弱い
教師の取り扱い	重点をおく	2．人類と環境 3．人口問題と資源・エネルギー 4．現代青年の諸問題 (a)	7．日本国憲法と国民生活	4．科学技術の発達と国民生活 5．日本の経済の特徴と国際化 6．経済の調和ある発展と福祉実現 8．民主政治　9．国際平和 (b)
	どちらも		1．現代社会と人間生活	
	軽く扱う	10．世界の文化 11．日本の伝統と文化 12．現代の文化 (c)	14．適応と個性	15．真理を求めて，思索することの意義 16．よく生きることと生きがいの追求 17．民主社会の倫理 (d)

注）Q5をもとに，教師の取り扱いと生徒の関心をクロスさせ，「現代社会」の学習指導要領上の項目を配置した。(a)は社会的・人類的問題を含み，問題単元的な取り扱いが可能であると言えよう。(b)は中学「公民的分野」との重複が多い部分。(c)が軽く扱われているのは教師の力量不足のため，と考えられる。(d)は倫理的分野に関わっているが，高1の発達段階への対処が必要であろう。

次に，授業の形態について聞いてみましたが，講義中心の授業が約75％(Q６)で，他の科目の授業と大きな差異は認められませんでした(SQ6-1)。一方，授業と対応する評価についても，定期考査の比率が約75％(Q12)で，これも他の科目と大差がありません(Q13)。「現代社会」という科目の性格を考えると課題が残るところでありますが，調査に対する次の回答が教育現場の実態を表しているように思われます。「教科書の構成上の問題と担当教師間の事情で，テストは結局教科書記述の暗記が中心となってしまい，私も生徒もディレンマを感じながらやっている。(SQ 20-1)。すなわち，「現代社会」の担当者たちの間で授業がばらばらに行われるために，結果としては教科書の記述の範囲内でテストが行われることになるのではないでしょうか。

③．指導上の工夫について

指導上工夫については，新聞などの切りぬき，読書感想文，個人研究，グループ研究，ディスカッション，ものを作るなどの作業，等々が考えられますが，教師の意志と実践の間にはかなりのギャップがあるようです(Q7)。「実践したいけれどもなかなかできない」のが実情でありましょう。その中でも比較的行われているのが，新聞などの切りぬき，個人研究とその成果としてのレポート提出のようです。

ところで，前に述べました学習活動の中で，生徒が講義形式の授業に比べてより積極的な反応を示すものとしては，個人研究またはグループ研究及び(実践例は少ないですが)施設等の見学やものを作る活動があるようです(Q8)。いずれにしても，生徒をいかに主体的に活動させるかがポイントになるかと思われます。逆に，現代の高校生にとっては，ディスカッションは苦手のようでありまして，平均値としては，講義形式よりも消極的になる，という結果が出てきています。しかし，中には時事問題を取り扱う中でディスカッションを核として授業を展開している事例もありました(Q11)。(週に１～２回以上ディスカッションを行わせる人が33名中２名いました。)

次に，時事問題を「現代社会」の授業の中にどのように取り入れていくかは重要な問題であると思いますが，調査の結果では，「授業の導入用に使う」が圧倒的に多く，次いで「レポート，宿題用に使う」が多かったようです(Q10)。また前に述べました「ディスカッション用に使う」も７名ありました。「時事問題の扱い方として，特に良いものがありましたらお書き下さい。」という質問項目(SQ 10-2)に対して数例出てきましたので紹介しておきますと，一つは「一つのテーマを，ある程度時間をかけて新聞等で調べさせてレポートの提出，発表をさせる」というやり方，もう一つは「指導内容と関連ある問題点を新聞などで事例として提示する」という基本的ですが，最も日常的に実践できるやり方，そしてもう一つは「特にディレンマを感じさせるもの，賛否両論を提示し，考えさせることのできるものを教材とする」やり方であります。特に，三番目の方法は，ディスカッション用の教材として，今後教材開発の必要があるのではないでしょうか。

④．教師の協力体制について

次に「現代社会」を実践するにあたって，他の教師とどの程度協力体制がとれているかを聞いてみました(Q16，Q17)。結論から申しますと，「協力体制はほとんどとれていない」のが実態のようです。例えば，共同の自主教材作成については「ほとんどしていない」が23名，相互の授業公開についても「ほとんどしていない」が27名(いずれも33名中)でした。資料の相互提供については「ある程度している」が5名，「よくしている」が2名と若干増えてきていますが，全般的に低調のようであります。次にその理由を聞いてみますと，「話題にはなるが，校務が多忙で時間的余裕がない」が17名，「話題にはなるが，他の受験科目に重点を置かざるをえないから」が7名ありました(SQ 16-1)。このような「多忙」と「受験体制」の問題とは別に，非常に考えさせられる理由が出てきました。それは「各自勝手なことをしているので他人の内容に干渉しない」とか「各自に教授権が分散しているから」という理由づけであります。私には，社会科教師の「科目主義」の伝統がその背景にあるように思われるのでありますが，いずれにしてもこの協力体制の弱さが，授業の展開の仕方や評価に影響を及ぼしているように思われます。

⑤．「現代社会」に対する現状評価について

さて，昭和57年度より「現代社会」が実施されてきたわけでありますが，この科目に対して教育現場でどのような評価が下されているのでありましょうか。調査結果(Q19)によりますと，まずこの科目に対するポジティブな評価としては以下の点が挙げられます。「教材，方法についての工夫が可能」，「生徒のものの見方をきたえることができる」，「将来きっと役に立つ」，「基本的な知識が身につく」，「生徒の実態に応じた指導ができる」，「他の科目よりも実践に面白味がある」，「生徒が社会問題に関心を持つようになる」。逆にネガティブな評価としては次の点が挙げられます。「内容にゆとりがない」，「科目のねらいが周知徹底していない」，「小・中学校の社会科学習の総まとめになっていない」，「科目としてのまとまりに欠ける」，「選択科目への導入にはなっていない」，「教えるべきことが多すぎる」。ほぼ予想どおりの評価が出てきましたが，一つだけ後の提案のために付け加えておきたいと思います。それは，「科目としてのまとまりに欠ける」という場合の「まとまり」とは何であろうかということであります。これについては後に述べることにしたいと思います。

次に，「現代社会」に対する現状評価として自由に記述してもらった中から，注目すべき意見をいくつかピックアップして後の検討材料にしてもらいたいと思います(Q19-1)。「実践の仕方によっては，生徒に社会認識の基礎を身につけさせられる非常に有効な科目になりうると思う。そのために教材研究と生徒の実態の正しい把握が不可欠」，「教師の側がしっかりと問題意識，広い視野を持ち，徹底した教材研究をしておけばこんなにおもしろく，また生徒ものってくる科目

はないと思う」,「内容に一貫性がなく，焦点がぼやけてしまう。科目の趣旨には賛成だが，教科書の構成を再考してほしい。共同で担当しているので，教科書に沿った形での授業しかできない状況にある。結局暗記中心の評価になってしまう」,「進学を主たる目標にしている生徒が多い学校にとってはお荷物以外の何物でもない。廃止すべき科目である」。以上の他にも考えさせられるさまざまな意見がでてきました。

それでは，今後の「現代社会」のあり方はどうあるべきか，という質問に対しては，それぞれの質問項目に対して顕著な賛成・反対はでてきませんでしたが，全般的特徴としては「学習指導要領の内容を検討したほうがよい」「内容を精選したほうがよい」という意見が多かったようです。また,「現代社会」を廃止することに対しては,「反対する」のほうが多かったようです。その他，教育行政のあり方全般についても自由に意見を書いてもらいました(SQ 20-1)が，全般的に教育課程の改訂が朝令暮改的で，教育現場の実態を踏まえていない，という意見が多かったように思われます。

最後に，今後の「現代社会」の担当の意志を聞いてみました(Q 21)。結果は,「担当したい」が11名,「どちらかといえば担当したい」が6名「どちらともいえない」が6名,「どちらかといえば担当したくない」が5名,「担当したくない」が4名，でありました。この数字をどう見るかは意見の分かれるところでありますが，私の推測では，学会員の「担当したい」意志は全国平均以上だと思います。しかし，問題は担当の意志の多少ではありません。「現代社会」を担当したくない理由の中にこそ，教育現場の実態が見えてくるように思われます(SQ 20-1-5)。「進学校にはお荷物」という意見は別にしまして(しかし，このような意見は決して無視できないのでありますが)，次のような意見をどう考えたらよいのでしょうか。「学校も生徒も他の先生方も必要性を感じていない。受験に必要ない科目はジャマもの扱いされている。教師自身が良い授業と考えても，学校・生徒が良い授業だと判断してくれるとは限らない。そういう中で自分の好きなように実践できないくらいなら担当しないほうがいい」。同じ現場教師としての私の推測ではありますが，このような意見は，教育現場において比較的若い，どちらかといえば発言力のない(こんなことは本来あってはいけないことですが)そのような教師たちの間に多いのではないでしょうか。たとえ勇気をふるって発言したとしても，多数決で押し切られる。極端な受験体制をしいている学校に赴任した新任教師が経験する最初の壁だと思います。

Ⅲ．いくつかの提案

以上,「現代社会」の現状についての実態調査の結果について若干のコメントを付け加えながら報告してきました。そこで次に，前述の調査結果をふまえていくつかの提案を試みるわけでありますが，その前に「現代社会」をとりまく諸問題について整理してみたいと思います。

まず，最も大きな問題として受験体制の問題があります。これは今さらはじまった問題ではありませんが，今日的な問題は，過去のそれと比較して質・量ともに深くかつ重い問題となっていると思います。すなわち，世の中全体が「ふるい落とし」の原則で動いており，地域も学校も(一部の批判の声を打ち消しながら)この原則にしたがって動いています。そして，この原則に忠実になればなるほど「効率」が価値あるものとされ，「無駄(あるいは回り道)」は消されます。そして無駄をなくすために「管理」が強化され，受験体制と管理体制が表裏一体のものとして教育の世界に君臨しているといった感じです。その中で，教師も生徒も「ゆとり」をなくしてしまっています。「現代社会」という科目は，その理念がより直接的に上述の原則に矛盾するものでありましたから，早くも学校の内と外から疎外されはじめたのであります。まずは教師集団が分解しました。この分解の仕方は二段階構造になっており，一つは，「現代社会」そのものに対する考え方の相違であり，もう一つは，「現代社会」の意義を認めつつも，他の科目に重点をおかざるを得ない体制を肯定するか否かの相違であります。その結果，協力体制がとられることはきわめて少なくなってしまうのでないでしょうか。一方，生徒集団も大人集団を見習って型通りの発想をする生徒も少なくありません。社会に対して問題意識を持つことは「無駄」なことだと考えている生徒も(私の経験では)実際にいます。しかし，可能性があるとすれば，多くの生徒たちの社会に対する「無関心さ」は上べだけのものであり，「無関心」を装いながら実は，多様な関心を持っているという事実であります。私は水俣病の授業を現地で実践した時，そのことを実感しました。このあたりにこそ，教師が切りこんでいく道が開かれているのではないでしょうか。

さて，問題提起に移りたいと思います。

まず第一に，(直接的には「現代社会」と関係ありませんが)教師の意識の変革が重要であると思います。先ほどから繰り返し述べている受験体制は世の中でいう一流校にはさほど見られません。(「有名」だと称される私立校は別でありますが)問題は二流校または三流校と呼ばれる高校の一部であります。そこでは一流校(その多くは旧制中学でありますが，そこに追いつき追い越すべくありとあらゆる効率化が推進されています。戦後の「国民教育としての中等教育」の理念は完全に崩壊し，高等教育の予備機関と化した学校が日々しのぎを削っているのが実態ではないでしょうか。このような状況の中で，「現代社会」は疎外されつつあります。しかし，我々現場教師にはそれでも自分のできる範囲で実践していくしか道は残されていないのであります。

二番目に，「現代社会」を実践していく上で今後どのようなことに留意すべきかについて，調査の結果を思い出しつつ提案してみたいと思います。

まず，「現代社会」は科目としてのまとまりよりも，科目のねらいを大切に，ということを強調したいと思います。学習指導要領では，「現代社会」の学習内容は「社会と人間に関する基本

的な問題」となっております。そもそも「科目としてのまとまり」とは何でありましょうか。おそらく我々の頭の中には「何か学習的に体系化された内容」が想起されるでしょう。

しかし,「現代社会」の学習内容は，そのような体系化された内容を参考としながらも,「社会と人間に関する基本的な問題」の中から，教師が自ら主体的に教材を開発すべきものではないでしょうか。従来,「学問的に体系化された内容」に全面的に依拠し，安住してきた教師にとっては，科目のねらいに対応して，自ら教材を創造するという主体的な作業は困難をきわめると思われます。「現代社会」は，我々現場教師にこのような新しい(というよりも，授業者としては基本的な)課題，すなわち主体的な教材開発という課題を与えたのでないでしょうか。

それでは,「現代社会」の教材開発はどのようになされるべきでしょうか。そのためには,「現代社会」のねらいに立ち返らなければなりません。学習指導要領によると,「現代社会」で育てたい学力は,「現代社会に対する判断力の基礎と人間の生き方について自ら考える力」であります。

すなわち，用語辞典的に言えば,「社会的判断力」の育成が強く望まれているわけであります。「社会的判断力」という用語そのものは，昭和43年の小学校学習指導要領以来登場しましたが，それ以前にも「社会生活において事象を合理的に判断する」,「科学的知性を備え，客観的，合理的に判断する」等々の表現がありますように,「社会的判断力」の育成は初期社会科以来の基本的課題であったともいえます。

ところで「社会的判断力」とはどういうものでありましょうか。ここでは詳細は省かざるをえませんが，いくつかの観点から述べてみたいと思います。

まず，我々が一つの判断を下そうとする場合，そこに何らかの「問題」の所在が必要であると思います。(「問題」自身がそもそも「判断する」という活動から生じるものではありますが,)「現代社会」の授業を行なう場合，実態調査の回答の中にもありましたように,「ディレンマを感じさせるもの，賛否両論を提示し，考えさせることのできる」教材を年間指導計画の中にもっと積極的に組み入れてはどうかと思います。その際，一般的にグローバルな「問題」単元が考えられますが，状況が許す限り，地域的な，より直接に生徒自身に関わる「問題」を扱うことの方が効果があると思います。なぜなら，後者の方が，判断というものにスリルを感じるからであります。スリルを感じない判断は結局，評論家的な(自分の身に直接には関係のない)判断の域にとどまってしまう可能性が高いのではないでしょうか。

次に，デューイ流に申しますと，思考の全過程は一連の判断によって成り立っているわけでありますが，判断の中には，事実に関わる判断と価値に関わる判断があると思われます。事実に関わる判断は，一般に社会認識と呼ばれているものであると考えられますが,「社会的判断力」といういい場合，これだけでは片手落ちだと思います。事実に関わる判断は「社会的判断力」の重要

な構成要素ではありますが，「社会的判断力」の本質は，むしろ価値に関わる判断を含めたところにあるのではないでしょうか。アメリカでいわゆる「新社会科」理論の後，それを克服する形で，一部の社会科教育研究者たちの間から，事実に関わる判断と価値判断を統合させた社会科授業のモデルが発表されています。そこでは，一人ひとりの市民が問題状況の中で自己の行動をより合理的に決定する，(すなわちより合理的に理由づけられた行動ができる)能力を育成することが主張されています。日本でも数年前から具体的に紹介されはじめております。アメリカの理論が，日本で即通用するとは思いませんが，一つの参考になるのではないでしょうか。

いずれにしても，「社会的判断」の個性を重視した，すなわち，価値の主体的選択を重視したはずの社会科が，いつの間にか価値注入型，あるいは価値逃避型に変わってしまったような感じがします。「価値自由」というのは価値から逃避することではないと思います。価値に関わる問題をどのように設定し，生徒たちとどのように関わらせていくかは「現代社会」の教材づくりの重要なポイントになるのではないでしょうか。

以上，実態調査の簡単な報告と荒けずりな提案を述べてきましたが，言うは易く，行うは難しの感があります。しかし，学会員の実践家諸氏の奮闘ぶりが調査を通して伝わってきまして，同じ仲間として勇気がわいてきました。

最後に，多忙な中，煩雑な調査にご協力いただいた学会員の皆様に感謝いたします。

(発表者　岩瀬)

【谷川】　どうもありがとうございました。数は少なかったんですけれども大変莫大なアンケートに基づき，きちんとした理由づけがある提案だったと拝見いたしました。引き続きまして，古山先生の方から，「全国高等学校『倫理』『現代社会』研究会」の報告をもとにしてご報告があります。よろしくお願いします。

Ⅲ．全倫研調査報告を中心として

【古山】　ただいまご紹介にあずかりました学芸大付属高校の古山と申します。今回のこのシンポジウムで，主催者側の横山先生の方から全倫研の立場を「現代社会」の実態ということで紹介してほしいと依頼を受けました。私の立場は微妙で，もともとMC 1期生として私自身は「現代社会」の教材化ということをいろいろと苦労しているんですが，全倫研はどちらかというと，かなり旧「倫理・社会」に愛着を感じておられる先輩の先生方が多い会であります。全倫研の立

場としては，旧「倫理・社会」のような倫理的な生き方の内容に関する指導が学校の生徒全員に行なえるような，いわゆる必修化，そのような立場を一応明らかにしている，そういう感じであります。

さて，全倫研では昭和62年１月26日と二度にわたりまして，文部省に対して要望書を出しております。最初の要望書の時には，臨教審の動きがまだ「現代社会」を必修から外すという方向ではありませんでしたので，要望書の具体的な内容は，１年次で「現代社会」を４単位，この必修を動かさずに，その中で４のわくでやるのではなくて，２，２に分けて，第１編と第２編とに分けました。そして，第２編の方を２単位として確保するということ。それと２年次において２単位，さらに，選択「倫理」の内容を改善し，仮に「現代倫理」，そのようなものを２単位全員に必修させたい。そういう要望書を提出じました。

この要望の理由としては，現行の「現代社会」４単位でやっているところでは，教科書の記述内容がだいたい２対１ぐらいの割合で第１編に重点が置かれているということ，現場の指導の実態として先生方の年間授業時間数の配分の中でも，やはり第１編の方を２，第２編の方が１ぐらいの割合で第２編の方が軽視されている。そのような実態を鑑みて，１年次４単位の中で，２，２に分けて，２単位倫理分野の確保ということを要望したわけです。

アンケート調査の概要

それから，７月28，29，30日と奈良におきまして「全国高等学校『倫理』『現代社会』研究会全国夏季大会」というのが行われました。そこで，全倫研調査アンケートというものを取りまして，「現代社会」，「倫理」，それから「政・経」の指導の現状，それから上記科目の指導の問題点・課題，今後の方向，合わせて生き方に関わる倫理的内容の指導のあり方，こういったものについて調査，アンケートを実施しました。そのアンケートの分析がこの全倫研調査報告というものです。それからさらに教課審の「中間まとめ」を受けまして，「現代社会」が必修から外される，そういう方向が明確に打ち出されましたので，何とかその「価値，倫理，人間の生き方」などについての指導の改善，充実に関する要望書，実質的に倫理的内容の指導が行えるような科目を必修として残してほしいという要望書を現場の生徒にアンケートを取りながら，資料として添付して提出したわけです。

それでは全倫研調査報告の内容分析に触れながら，現場の，特に「現代社会」をめぐる実態ということについて少し報告させていただきたいと思います。この調査アンケートの母体は全倫研夏季大会に参加の先生方103名，それに全国に郵送で依頼した41名の計144名です。最初に用意したアンケートが200部でしたので，回収率72％ということでした。それで「現代社会」について，それから選択「倫理」について，それから倫理的内容の指導について，と三部にわたって調査を

実施しました。この中で，主だった特徴というものをまず現場の先生方の「現代社会」の取り扱い方，生徒の側の「現代社会」あるいは「倫理」に関する興味・関心，そういったことについてまとめていきたいと思います。

履修形態

まず，右かたに①，②，③，④とページ割りが振っていますので，そこを見ながら，6ページを見ていただきたいと思います。6ページの左側の4番。調査に協力された先生方の「現代社会」，「倫理」，「政治経済」に関する社会科の教育課程という中で，「現代社会」は必修としまして「倫理」，「政・経」の成立率というのがどれくらいかということですけれども，144校の内，選択「倫理」が成立しているのが79校，約55％です。それから，「政治経済」の方が，これが103校，約72％です。選択「倫理」と，「政・経」を比べると，「倫理」の成立状況の方が約半分強ということで悪いということが言えるわけですね。特に全倫研の母体が旧「倫・社」の専門の先生方が多いということがありまして，特に「倫理」，それから「現代社会」の中の倫理的内容の指導ということに関して触れていきたいと思います。6頁の4番，「現代社会」の履修の形態，これを見ますと，東京で分割履修が多いのに対して，東京以外の他県では「現代社会」の主旨を生かすべく，一人の先生が4単位分を担当されています。全体の58.3％になっています。大変な努力をされていらっしゃるということですね。東京でも努力されている先生が大勢いるんですけれども，分割履修でなくて，4単位実践されているのが比較的多いということです。

それから6にいきまして，「現代社会」を完全に教科書の隅から隅までやっているか，やっていないかということなんですけれども，割愛されている先生方が63.4％，全部実施しているのが36.6％ということですね。共通一次から外れることによって，もっとこの割愛率が高くなるのではないかと予想されます。

それから7番目に行きまして，どうして割愛しているか，その内容なんですけれども，一つには旧「倫・社」専門の人が「現代社会」にこうして政経分野を素人ながら教材研究を独学でやって行く，そういう不慣れな点だとか，あるいは授業時間不足であるとか，項目が多岐にわたるということで不足を感じるということを，それから内容を少数精選するべきであるとか，あるいは独自の体系性を持った年間計画のために割愛せざるをえない内容が出てくるとか，そういうことですね。

それから，かいつまんで触れていきますけれども，9番目に行きまして，これは先生方が「現代社会」の学習指導要領に沿った項目，どのように扱っているかということなんですけれども，見方としては項目別，重視する人，省略する人，4単位ではなくて，2単位だけ扱っている人がどういうふうに重視しているかということです。それで，各項目の中で白抜きで，順位が書いて

ありますけれども，重視する人の中でのベストテン，省略する人の中でのベストテンということで項目別のベストテンなんです。それを見ますと，全倫研では前にも何回か，過去に二回ぐらい，「現代社会」に関する実態調査を行いまして，前回との比較をしてみると，「政・経」の分野の取り扱い方，これが段々増えてきたということで教材研究の扱い方に慣れてきたことがあります。それから旧「倫・社」から「現代社会」に移行した直後の時には「倫・社」の色合いを残していた「文化的分野」とか，「適応と個性」，「民主社会の倫理」，こういったものの取り扱いの比率が，わりあい高かったんですが，それが今回減ってきている。かなり軽視しているというか，そういう特徴が見られます。

倫理的内容の軽視

その辺がどういうことなのかというと，一つには盛りだくさんの個々の内容の教材研究に忙殺されてしまって，人格形成のための社会認識や個人認識という「現代社会」の趣旨生かしきれていないのではないか。特に「文化的分野」の中の「現代の文化」を省略する人が増えているんですけれども，教材化の方法論とか全体の中での位置づけがまだ明確に概念化されていないのではないか。あるいは「民主社会の倫理」，「適応と個性」，これも「現代社会」の主旨を生かすならば，必要なものなんです。それも主旨が徹底していないのではないか。全体として「現代社会」という科目は全倫研の先生方の中で，系統性に欠けている，一貫した取り扱いが非常に難しいという指摘が多いんですけれども，逆にその統一的な視点，「現代社会」の主旨を生かすような視点というものが醸成段階にあって暗中模索の段階で，まだまだ確立しきれてないのではないか，そういうことも言えるのではないかと思います。

生徒の興味・関心

それから生徒の側の興味・関心なんですけれども，生徒の方は「人口問題と資源・エネルギー」，「現代青年の諸問題」，「人類と環境」など自分自身にかかわる身近な現実的・具体的な，現代的な諸問題についての関心が高いということ。反面「経済分野」であるとか，あるいは「倫理分野」の哲学的な思惟とか，あるいは「民主社会の倫理」，「自由と責任」とか，「権利と義務との関係」，こういった抽象的，あるいは全体的な問題の関心がやや低いということがあります。これは一つには，１学年で履修することによる発達段階的な差異の問題があるのではないか。２学年，あるいは３学年で実施すればもう少し高くなるかもしれない。そういうことも考えられます。あるいは最近の新人類と言われるような生徒達の活字離れの特徴，非合理的な特徴，そういったことが出ているのかもしれないということが言えます。

それから，「現代社会」の取り扱い方ということで，現場の先生方がどのような工夫をされているかと言いますと，非常に多岐にわたっています。討論形式とか，研究発表，３分間スピーチ，

読書感想文，施設見学，作業学習，視聴覚教材等，多岐にわたっており，かなり「現代社会」を「倫・社」専門の人は苦手としながらも，教材化ということに苦労されていることが伺われます。

それから，9頁目の14番として，「現代社会」の持つ良い点，評価すべき点ということで，「イ，エ，カ」等，生徒の見方・考え方を育てるにふさわしい，学校の生徒の実態に応じた指導が可能である，教材・方法の点で様々に工夫ができるという点が，積極面として評価されていますけれども，一方「ア」の解答の「内容が広範囲にわたるので，総合的な社会認識を養うことができる」というのが多い。

内容構成の問題

実質的な取り扱いのあり方としては，「文化的分野」，「民主社会の倫理」，こういった項目が軽視されていることから考えると，総合的な社会認識とは何を意味するか。それが問題点として指摘されるのではないかということです。

同じく，項目15にしましても，系統性がないと不安であり，独立した教科とみなされない傾向がある。「現代社会」の特色を生かした統一的視点とは何か。そのあたりでまだまだ現場の先生方が，「現代社会」が完成段階に入っているのではなくて，暗中模索の醸成段階にあるのではないかと言えるのではないか。

それともう一つ，「現代社会」の科目自体の問題としまして，成立時に，「政・経」，「倫・社」，「歴史」，「地理」等，各科目での，色々なトラブルがあったらしいですけれども，現行の教科書の記述内容というのが，大きく「政・経」，「倫・社」に比重が置かれているということが一つの問題です。

ために，担当されている先生方に，旧「倫・社」，「政・経」系の人々が多いということ。

それから，教科書の記述内容ですが，政経分野というのは，中学校の公民の基礎があるので，だぶってしまってやりにくい反面，生徒の方は基礎があるので慣れ易いということ。

それに対して，倫理分野の方は，思想史的な基礎がなくて，いきなり主題別学習をするわけです。つまり，旧「倫・社」においては，思想史的な学習が中心でしたが，それに加えて，時代背景とか，人間に関するエピソードを加えたわけですけれど，思想史的基礎が無くて，いきなり主題別学習をすることに，取り扱いの難しさがあるということです。

それから，これは意外な発見だったんですけれども，「現代社会」が非常に総合的な科目として，単位数が4単位で，単位数が多いということの内在的な制約が多い。ということは，4単位必修で置きますと，どうしても持ち時間の関係から，一人で，例えば，6クラスも8クラスも持てなくなるんですね。そこで，各クラス違った先生方が分担して受け持つ。例えば，「世界史」や「日本史」の先生方も受け持たざるを得ない。そうすると，どうしても自分の専門外のことについて

の扱い方，特に倫理的なものに対する扱い方が軽視されがちである。特に，入試に関係ないものという意識が働くと，なおかつ，専門外の先生が担任等持たれていたりすると，「現代社会」が軽視されてしまうこともある。そんなことも指摘されています。

「倫理」について

そんなことから，これは私自身の個人的見解なのですけれども，「現代社会」の内容自体が，もっともっと，「倫・社」，「政・経」だけではなくて，「歴史」や「地理」を含めて，等分に合体したようなものに，内容構成の改善というようなことが図られるべきではないかと，私自身思っています。

それから，選択「倫理」についてですけれども，３年次に置くことは，発達段階から見れば非常に「仮説演繹的思考」が発達しておりますので，非常にやり易いということがあります。

しかし，選択科目であるために，入試との関係から，先程も講座の成立率が55％と言いましたように，取っている生徒の数というのがまちまちで，たったの一講座で，例えば，受講者が一校だけで６人ということもあります。何とか，より多くの生徒に受講させたいという教師の願望から見ますと，非常に不十分というようなことが言えます。

それから，「倫理」の内容についての生徒の興味・関心についても，10項目目に挙げておきましたけれども，やはり「現代社会」の興味・関心と似たような傾向があらわれています。自分の心の悩みの解決に役立つようなものへのあこがれ，こういうものが見られるんですね。

これは価値観の多様化した社会的変動期における，確実なものを求める気持ちの現れと見ることができるのではないか。その反面，合理的な物の考え方，ベーコンやデカルト，プラグマティズム，こうしたものへの関心が低いということ。あるいは，日本の儒教や国学，古代日本人の考え方に関する関心も低い。このあたりが一つの問題点ではないか。

「現代社会」の中の倫理的内容

そこら辺，教師の側の「現代社会」の取り扱いにしても，合理的なものの考え方，日本国憲法を圧倒的多くの先生方が取り扱いますが，それを受けるような形での社会契約的なものの考え方とか，民主社会の倫理，自由と責任，権利と義務とか，そこまで少し突っ込んで系統性を持たせるとか，それが現場の先生方の課題ではないかと思っております。

それから倫理的内容の指導に関しては，11項目ですけれども，やはり，「倫理」の成立率が低いということ，それから，「現代社会」の授業時間の比例配分，指導項目の比例配分が政経分野に偏りがちであるということから考え合わせて，現状においては，倫理的内容の指導が十分行われているとは思えない。そういう解答が８割方，非常に多いということですね。

そういう倫理的指導がどのような形で行われたら良いかについて意見を集約してあります。そ

れが11頁の項目３番です。

これは少し，時間的に急いだために，ジャンルごとに分けてなくて，少し煩雑で申し訳無いのですが。

今まで言ってきたことを改めて，かいつまんでまとめてみますと，現行の「現代社会」「倫理」では，倫理的内容指導が不十分である。その理由として，その一つには，４単位であることの制約，専門外の先生が持たれているということ。だから，かえって，２単位必修のほうが望ましいのではないのか，そういう問題提起。それから，中学校公民分野との区別がつきにくい。

あるいは，歴史的なものの欠如，内容構成の再検討というようなことですね。それから，旧「倫理・社会」の復活等ということを，ベテランの先生方は，表立って表明しませんけれども，かなり希望しているようです。と言いますのは，旧「倫・社」と現行「倫理」を比較してみると，現行「倫理」のほうが不十分である。旧「倫・社」の方は社会学や心理学の成果を盛り込んでいたために，現行「現代社会」により近かったのではないか。つまり，社会認識の面で，より良かったのではないか。なおかつ，発達段階的に見ても，２年次で学習するということが１年次よりは精神年齢が高い。３年次と比べると，３学期から授業が無くなってしまうとか，単位の確保という面から見ても，受験に意識を集中せざるを得ない３年生の時よりは，２年の方が良いのではないかということがあります。それから，現場の先生方自体の問題点として，総合性の問題ですね。盛りだくさんで，一貫性が無いのではないかと思っている先生方が非常に多数います。けれども，社会認識と個人認識を合わせて，人格を形成していくという新たな系統性，パラダイムの転換が求められているのではないかという感じがする。

全倫研の立場

それから，13頁に行きまして，全倫研秋季大会で発表したこの調査報告が，日本教育新聞の記者に報道されまして，このような形で載りました。全倫研の団体としましては，見出しの扱い方に少し不満を持っております。まるで，これでは，全倫研は「現代社会」を否定しているのだという見方をされてしまいますので，少し不満なのですけれども，載ってしまってはしかたがない。こういうものが紹介されたのだということの紹介です。

そして，改めて，14頁に行きまして，再度の要望書。何とか，必修選択群ということで選択科目に落とさないように，なるべく人間としての生き方に対する指導の充実を具体的に図ることを期待する。そして，「中間まとめ」で，先程も吉田先生からもご指摘がありましたけれども，日本の文化と伝統，あるいは国際人としての自覚とかそういうことの資質を養うこと。これは，まさに社会科に課せられた使命である。そして，豊かな心，あるいは，真理を求める心，自然を愛する心，崇高なものに感動する心，あるいは，感謝の心，あるいは，基本的な生活習慣，規範を

守る態度，自律自制の心，こういう諸々の価値を実現するには，まさに，生き方に関する指導の徹底が図られなければならない。従来以上に社会科を重視する必要があり，とりわけ「価値，倫理，人間の生き方」についての教育を重視するべきである。それには，生き方の指導について，一層の意図的・系統的に，指導をする科目の設定を期待する。このあたりで，旧「倫理・社会」みたいな，意図的，系統的倫理内容に関する指導科目を必修科目として，是非とも置いて欲しい。それが基本的な，全倫研の立場であると思います。

紹介する中で，私個人の見解が非常に微妙な立場にあるということ。私個人は「現代社会」を存続させて，内容構成を是正して，より総合的な科目に発展していってもらいたいという気持ちが強いのですけれども，全倫研の立場というものも，少なからず関わっていく中で少し影響されているところもあります。

全倫研の立場は，「現代社会」を否定しているのではなくて，現行の「現代社会」，あるいは，選択「倫理」では，倫理的内容の指導が不十分である。何とか倫理的内容の指導が確保できるようなカリキュラム，こういったものを設立していってもらいたいということなんです。

それと，全倫研の活動についてご報告申し上げたい。全倫研は毎年，夏と秋に2回ずつ全国大会を開いております。全倫研の下位団体として，事務局の中核となる都倫研，東京都「倫理・社会」研究会というのがありますけれども，これが年4回の公開授業，例会を開いております。明日も九段高校であるのですけれども。それから，年間を通して，分科会というのが3つありまして，これが毎回，レポーターを決めて，輪読会を開き，勉強会という形で開いております。61年度の分科会の構成というのは，第1分科会が「『現代社会』の基本的な問題と人間のあり方を考えさせる指導内容，方法の研究」，第2分科会が「現代社会と人間の生き方と『倫理』の系統的な指導内容，方法の研究」，それから，第3分科会が「現代高校生の人格形成とそのあり方に応える『現代社会』の研究」となっていました。

こういうふうに，「現代社会」をいかに教材化していくかということに対して，全倫研は否定的ではなく，むしろ，非常に，毎日生徒と接していく中でやっていかなければいけないので，暗中模索している状況があるわけです。私としても，都倫研に参加していて一番メリットとして感じるのは，分科会に参加して，実際に現場の先生方が多種多様な「現代社会」の教材化，どういう取り扱いをしているか，その情報交換というのが一番有難いと思っているんですね。

全倫研の立場というのは，基本的には，倫理的内容の指導の必修化ということなのですが，誤解して欲しくないということを付け加えて，一応終わりたいと思います。ありがとうございました。

【谷川】　2，3分休憩を取ります。その間に，後の質疑応答のための整理を，各人がして下

さい。では，次に中学校の現場の立場から田辺先生にご報告をお願いします。

Ⅳ．中学校現場の問題点をさぐる

田　辺　正　一　（東京都葛飾区立新小岩中学校）

【田辺】　よろしくお願い致します。新小岩中学校の田辺と申します。マスターコースを終了して５年経ちまして，現在，新小岩中学校で５年になります。用意が無いものですから，まとまりのある話ができないと思いますが，よろしくお付き合い下さい。

現場の方は忙しいという話が先程ありましたが，教科の授業は30％程度，教科指導，生徒の指導，教育相談や色々な指導，それと事務，私の場合は５年間連続，時間割をやっております。それが，だいたい同じ位の割合で時間を食うというのが一般的であるということです。教科指導よりも，それ以外のことが忙しく，私等は５年同じ学校にいましても，あいつは社会科だということに気づかない人もいるほどです。時間割の田辺，教育相談の田辺だとかの方が通りがよいほどです。

社会性の欠如

ところで，どんなことが大変かと言うと，生徒がここ数年変わってきております。「現代社会」のことを先程から聞かせていただいておりますが，今年入ってくる一年生をながめても，３年後に「現代社会」の授業を果たしてこの子達が受けるんだろうか，とてもこの３年間でそんなことができるんだろうかと思わせられる子ども達が増えてきています。

小学校の先生等と年に一回，来年入ってくる子はどういう子なんでしょうかという内容の協議を致しますけれども，年々，そういう「厳しさ」というか，「難しさ」が深まっていくというように，小学校の方々は言っております。小学校の先生に言わせると発達がいびつであると，こちらから言わせると社会性が未成熟であるというか，対人関係でうまく自分の欲求を処理できない。例えば，授業中，手を挙げて質問したり，答えるということもうまくいかないんです。とにかく，自分が聞きたい時に聞いてきて，それに答えてやらないと納得しないんです。

そして，１年生ぐらいですと一斉授業という形に全員がうまくいくようになれさせるくらいで，２年生ぐらいで本格的に勉強する。３年間たって卒業する時に，やっととにかく義務教育を終わったといえる常識を身につけさせられるかどうかという，そういうような状態です。私どもの学

校の社会科の教科部会での各学年の目標も，だいたいそんな実態に合わせて毎年，1年は興味を持たせ，授業に取り組ませる。2年は学習方法を身につけ，3年で社会人としての常識を身につけるといった内容に落ちついております。だんだん激しくなっていくということも，小学校の側から聞いております。これからどうなっていくか不安を感じております。

小学校段階での問題

もう少しその内容に触れたいと思います。小学校の方の様子を聞きますと，東京都の場合ですと，都研で，身体関係のデータは数字でそろっておりますが――発達が非常に速くなったと同時に，同じ学年内での差が激しくなっている。また，親の世代も子ども時代はもう兄弟が一人や二人の，非常に少ない状態である。ほったらかしになってしまって育ってしまう子どもも何人かおりますが，ほったらかしでなくても事実上，あまり手を入れられずに，小学校を終わって中学に入学してきてしまって，そこで思春期前期を迎えて，問題が一時期に爆発してくるというのが，かなりいます。数字ははっきり調査をしておりませんので，5年間持った私のクラスの場合で申しますと，まず朝食を食べてこないというのは，(40人前後のクラスで)少ない時で10名，多い時は25名でした。何らかの形で，片親が離別している状態で育ったというのが，一番少ない時で5名，一番多い時で16名おりました。親はいればいいというものではなくて，いたらいたでやたらベタベタする親もいます。特に男の子が最近は，母親ベッタリで育ってきまして，社会規範(一般的なこういう場面でこうでなければいけないというような，そういう規範)になかなか従えない。ダラダラ，ダラダラと，そのまま3年ぐらいになってしまう。何とかそれを「お前はもう卒業しちゃうのだぞ。卒業して，高校(97％は行きます)でなんとか適応できるように。」と，そこまで何とか指導を卒業後もしばらく続けるのですが，それ以上の事はとてもしていられない現状です。そういう状態の子がかなり入ってきます。学校によってもちろん違うと思いますけれども。

中学校の対応

教科指導などもかなり影響を受けます。まず標準の時数でいうと，年間35週間あるはずですが，教室でただ座って授業を受けるというよりも，体育大会であるとか，学校行事，遠足，そういういろいろな行事の中で，「人とのふれ合いの未発達な部分を何とか育てなければならない」という方が，まっ先に来てしまいますので，実際に(クラスによっても差ができますが)少ない場合ですと，年間28週ぐらいに，かなり減ります。その中で社会科の教科部会などで一番問題になるのは，教材の精選のみです。毎年やられるわけですが，徹底的にけずります。場合によると，「ここはやらない」と。これは例えば，あとは移動教室なんかで事前指導やる時に，地図の読み方を教えてしまおう。他のものと合体させて，何とか一年間でカリキュラムを終わる状態です。今年の教科部会ではさらに，公民的分野の社会的分業とか，あのあたりは進路指導とからめてやって

いけないのではないだろうか，と。そういう工夫をしていこうという話が出ております。問題になるのは手のかかる形で入学してくる生徒がふえてきている。中学３年間ではとてもとても，高校１年生で「現代社会」をやって，その目的を達成できるのが，百人のうち何人いるだろうか，と心配になる状態です。理論でいう発達段階とまた違う。現実に今育ちつつある子どもがどういう発達をしてきているか，何がどこで必要なのかということを調査した上で，中学校というのは思春期前期であって　　前期に入るところですね。高校は，思春期後期である。思春期全体の中でどうするかということを，もう考えねばならない所に来ている。これは，実証的な裏づけがあるわけではありません。ただ，一つの学校にいて，毎年入ってくる生徒を見て感想を言っているだけです。

あとの高校生の方のお話の中にも，そういう形で卒業していく生徒たちが高校生になった時に，どうなるかという事がたくさん出てくるかと思いますが，特徴を　　その時，理解を助けるかもしれませんので　　あげておきます。例えば教科書を読むという語学力です。これもすごく個人差があります。読めない子もけっこういます。読める子の中でも，長い文章や屈折する文章は理解できません。読みこなせる子はごく少数です。だいたい，２，３行までですね。そこまでで一つの意味のあるものが頭に入るのではないと，混乱してきます。教科書はできるだけ，読みやすいものを選びたいと思っております。教科書等の記述についてもこれは大多数の生徒がどうであるかという実際の調査がないので，どうにもなりません。そろそろ調査をしてみると，かなり今までとは違う結果が出るような気がします。

習熟度別のクラスという話も出てまいります。これは中学校の中でも意見が分かれると思います。指導内容にもよりますが，点数がとれるように実力をつけるという意味では習熟度はいいでしょう。しかし，先に申しましたような対人的な能力を育てるという意味では，習熟度というのはあまり賛成できない。私達の学校では，むしろ，授業の中に班活動というものを，取り入れる等の方向で動いております。

一般論としていうと，だいたいそんな所です。あと，御質問等ありましたら，御質問いただきたいと思います。

【谷川】　ありがとうございました。実態はよくわかりましたので，できましたら，そういう中で，どんなふうに取り組んでいくかという話も，また後でまた少しお聞かせ下さい。それでは最後になりましたけれども，高等学校の教育現場から，川原先生にお願い致します。

V．高等学校教育現場の問題点

川　原　尚　子

【川原】　ただいま，ご紹介にあずかりました川原と申します。

この大会に関しまして，私に課せられましたテーマが，「高校教育現場の問題点」という非常に大きなものでして，もとより解決策など全く私自信見当がついておりません。ここにいらっしゃいます方々の中には，私以上に，現場の経験をお持ちの先生方もたくさんいらっしゃると思いますので，そういう皆さんを前に，非常に困っている状況です。そこで，皆さんには，今回は，高校教育現場で働く者の日々の感想と，それから，試行錯誤の一部をお伝えするという形式でお話を進めさせていただきたいと思います。現在私は，高校教師として５年目に入っております。２校目に勤務中です。前任校，そして現勤務校ともに，タイプは全く違います。けれども，一応いわゆる新設校の部類に入っております。埼玉県に約180の公立校がありますので，私の二校程の経験では，あまりにも経験が乏しいといわざるをえないと思います。そこで，日々仕事の中で接している先生方の感想もとり上げて，そのようなレジュメにしてみました。

現状の概観

まず一番最初に，高等学校教育の現状ということで，概観をしてみたいと思います。埼玉県だけでなくて現在高校教育自体，非常に大きな問題をかかえています。先ほどの田辺先生の中学校の問題とはまた違った意味で，非常に重大で根の深い問題をたくさんかかえてます。その根本の一つには，レジュメの一番最初にあげましたように，学校が人間の完成を目指すという本来の機能以上に，社会的選別機関という役割を果たしてしまっている点があります。これは，教師として日々，あるいは，対外的にも非常に強く感じる所です。先ほど多様な中学生がいるというお話が出ましたけれども，高校入試というものは，この多様な中学生の９割にも及ぶ生徒がくっきりと選別されてしまう最初の機会ともいえるわけです。そして，このほぼ９割という進学率から，一口に高校生と言いましても，かつては考えられないほど多様な学力・個性・能力そして家庭環境・社会環境とを持った生徒がいるのです。さらに高校生となった彼らが将来の進路選択に，受験というハードルを置くか否かによって，彼らの日常生活は自ら規定されてしまいます。

また学校自体もどのような生徒が集まるかによって，大きく社会的にも色分けされてしまっています。これも少し極端な例であると思いますが，つきつめて言いますと，例えば埼玉県の場合には，伝統のある受験校と底辺校…この言葉はよく使われているのですが……社会が全体で判別してしまうわけなのです。底辺校という言葉をお聞きになった方が，少ないのではないかと思う

のですけれども，非常に現場ではよく使われている言葉です。これは別名，社会福祉型高校とも言われております。内容はおわかりになると思います。両者の違いを埼玉県の例で具体的に言いますと，受験校の方では主体的な学習週間が習慣づけられておりまして，授業にも，教員すらも必要としないほど自主的な勉学への意欲を持った生徒が集まります。もちろん数は少ないものです。一方では，高校生ではあっても，授業にあたって，出欠をとる時に，「はい」ととにかく自分の席で返事をさせる事，それから50分間席につかせている事，の二点だけでも，毎時間毎時間やらせたいと切実に教員が願っている，そういう学校。もっとひどい場合には，まあこれは，偏差値30台とよく言われていますが，自分の住所・氏名を漢字で書けない生徒に，「現代社会」を教えなければならないという学校があるわけなのです。この両者の隔りは，あまりにも大きいと言わざるをえないと思います。とても高校教育を一口では語れないと思います。この点は非常に大きな問題なのですが，今回の大会の意からはずれると思いますので，問題点と現状の指摘のみで，一番の方は終らせていただきます。

基礎学力の低下

次に，このような現状の中で，社会科教育がどのような問題をかかえているかをレジュメの２番にそって見ていきたいと思います。学校の中で，よく冗談で言われる言葉なのですが，社会科は理科と並んで，主要５教科の中の“不要二教科”とよく言われるのですね。聞く度に，「そうだそうだ」と私なんかもうなずいてしまいます。もちろんジョークなのですが，これは現在の社会科の立場を非常によく表わしています。全般的に言いますと，生徒たちは社会科に対して，それほどの重要性と興味・関心を見出さないままに，高校に来ています。この中で教師は少しでもよい方向へと努力をしている状況ですが，そのような教師がまず一番先にぶつかるのは，レジュメの一番の基礎学力の低下という問題です。少なくとも高校生として，もう既に知っているであろうと思われる知識，さらにはもう知っておいてもらいたいと思っている知識，それがあまりにも，彼らに定着していないという事に毎日のように驚かされていきます。

私自身，毎年授業の第１時間目に，簡単にアンケート形式で生徒たちにテストをしています。内容は，日本の県名とか，あるいは埼玉県内の市町村名とか本当に簡単なものなのですけれども，驚くほど知りません。私の現在勤務している高校は，あまり使いたくない言葉なのですが，新設校にしては非常にいい学校でして，偏差値を60少し越えるぐらいの生徒が集まっています。でも埼玉県の市名を20書ける生徒は，１クラスに２人ぐらいしかいません。そのぐらいに基礎的な知識がないわけなのですね。そして，このような上で，授業を進めていくにつれて，レジュメの二項目にあります倫理的な思考力の欠如という点，これが大きな壁として，日々の授業の前に立ちはだかってきます。

論理的な思考力の欠如

具体的な事物には，非常に反応を示す生徒ですが，抽象的，論理的な思考には全くついてこれない生徒が非常に多い。高校生にとって，一番不評な科目は，古山先生には大変申し訳ないのですけれども，実は「倫理」なのです。これは私自身の経験ですが，例えば思想史の中で，ルソーを取り上げる場合，何とか印象を深めたいと思いましてルソーの写真を見せます。と，何人かの先生は既に経験済みだと思いますが，「あ，これはタレントの誰かに似ている」と言うのですね。ところが，ルソーの思想そのものは全く生徒に何の印象も残す事ができないわけなのです。私の授業のやり方にも問題があると思いますが，「人間とは何か」という疑問を全く持った事のない生徒たちに「倫理」を教える事の難しさというものを痛切に感じています。私以外の先生方も感じていらっしゃるようです。これは，「倫理」だけではなくて，他の科目についても，具体的な事物に関しては反応を示すけれども論理的な抽象的な思考にはついてこないという同様の傾向が認められています。

授業時間数との闘い

次に，授業そのものについて言いますと，三番目に，授業時間数との闘いがあります。あえて強い言葉を使わせていただいたのですけれども，この古くからの問題点が，いまだに解決されないままに残されています。通常の単位数では，とても教科書すら終わりません。何を教えるかという問題とからんで，いまだに解決されていない大問題だと思います。また，高校の中での教員の担任や校務分掌との関係から，自分の専門分野とは違った科目を教えなければならないという事態も，しばしば現場では起こってきます。例えば私自身は，筑波大学と教育研究科の方で，日本史を専門に学んだものなのですが，「政治・経済」以外の科目は，すべてこの５年間でやらせていただきました。これも教員にとっては，非常に大きな問題になっていると思います。そして，最後に，先ほどにも一番最初に触れましたが，生徒の意識の問題というものが大きくたちはだかってくると思います。生徒が社会科に対して持っている意識をまとめてみました。レジュメの方をご覧下さい。

もちろん私がこのようなことを指摘するまでもなく，こういった諸問題の解決のために，現在さまざまな解決策が試みられていると思います。解決策についてレジュメの方をご覧下さい。解決のための方策は，学校や教育行政の側からのものと個々の教員の努力によるものと大きく二方面から行われていると言えましょう。まず教育行政側から言いますと，多様な生徒の実態に即して新しい学校を模策し，いくつかの構想を実行に移している段階だといえると思います。埼玉県の例をあげてみましょう。

総合選択制高校

埼玉県では現在，そこにあるような三つ程の観点から高校教育改革に取り組んでいます。実は私の勤務しております伊奈学園もそういった構想の一つであり，昨年もこの場で少し話をさせていただきましたので，ここでは構想と特色については，話を省かせていただきます。ただしこの学校は，三校分の規模を持ち，そして社会科に関していいますと，「現代社会」を１年次で四単位で必修，あとの科目は全て選択科目にしているという，総合選択制を採っている学校だということはご了承いただきたいと思います。この伊奈学園，埼玉県が一大決意をして立てた一大プロジェクトなのですが，本年で開設三年目でありまして，まだ成功かどうかは何ともいえない状況です。しかし，この学校で私は現在二年目の勤務を行っていますが，現時点での問題点を参考として，いくつか下の方にあげてみました。全て大規模な選択制の実施から生じる問題点ばかりです。しかし，選択制のメリットというものも日々の授業の中で強く感じている毎日でもあります。今後，構想と現実とのギャップを埋めていく努力を続けていかなければならないと考えているということだけは皆さんにお知らせしたいと思います。

先ほどの行政側より以上に不断に続けられているのが，次の個々の教員の創意・工夫・努力というものだと思います。現在社会科が抱える問題点を日々感じているのは誰よりも教員であり，そして本当に切実な状況に置かれている先生方も数多くいらっしゃると思います。思いつくままにこういった工夫・努力をあげてみましたが，もちろんここにある以上の努力と挫折が繰り返されていると思います。私もここにあげた諸点に留意しながら，微力ながら手さぐり状態で社会科を模策している状態ですが，昨年度多少なりとも通常の授業とは違った反応があったと思われる例があります。ちょうどテーマにもそって「現代社会」の授業ということもあり，大変恥ずかしい例ですが，少し話をさせていただきたいと思います。

「現代社会」の実践例

これは「現代社会」の授業なのですが，一昨年の夏，あのサマンサちゃんという女の子が飛行機事故で亡くなったという事件がありました。あの事件などのいろいろな時事問題を授業の導入に使われている先生方が多いと思います。私も「現代社会」の授業では，時事問題をよく導入に使うのですが，あのサマンサちゃんの事件をですね，導入として国際平和とか防衛等の問題について考えさせる授業を行いました。詳しくは，資料を置いてきてしまいましたが，３，４時間程度の教科書とか資料集とか，それから様々な書物等を使って解説をした後，「核戦争後の地球」というビデオを授業で見せました。こちらの方はご覧になった先生方も多いと思いますが，ＮＨＫと教育テレビの方で何度かにわたって行ったものを，伊奈学園は非常に施設・設備が整っておりますので80分程度にまとめまして，それを生徒に見せました。よくビデオなどを授業の際に見

せてみるのですが，その場合には，必ず私個人としては，専用の用紙を作りまして内容の要点をまとめさせることと，後に感想を書かせるということをやっております。

この「核戦争後の地球」を見せた後の感想文では，生徒が非常に真剣に書いていました。例えば鳥肌がたったとか，目の前が真赤になったとか，大変強い印象を与えたことが感想文の中からうかがえました。この後グループ学習に入りました。いくつか私の方から設定した国際平和に関するテーマを出しまして，これを各グループごと一つずつ選ばせましてレポートを作成させました。このレポートの最後には各グループごとに「世界の平和の実現のため」という非常に大きいテーマで座談会を行わせまして，それをカセットテープに吹きこませまして提出することを義務づけました。提出した後レポートはこちらの方で評価をします。それからまた授業中に，生徒の努力と苦しみの結晶である座談会カセットテープを聞き合う時間を設けました。

テープの方は今日は用意できませんでしたが，その際提出されたレポートのいくつかを持ってまいりました。例えばこれは一年生のあるクラスですけれども，表とかいろいろ書いてありまして，また表紙もこちらが全然何も言わないのに，このぐらいこって書いてくるんですね。それからこちらの方も同じく一年生のレポートです。グループは大体７人から９人ぐらいのグループなんですが，表紙の方にはアルバート・アインシュタインの涙などが書いてありまして非常にこったものです。それから一番分量の多かったのがこれなんですが，この厚さですからレポート用紙一冊は優に越えております。もとよりテーマ自身非常に大きく，抽象的な思考などほとんどやったことのない生徒ですし，また私自身も先ほど言いましたように日本史の方をやっておりましたので，解らないことも多くてなかなか大変でした。しかし，生徒は非常によくやりました。内容的に見れば，詳しい資料や内容に基づいて，国際平和について完全に理解し，消化したとは言えないかもしれません。けれども，とにかく授業の印象だけは非常に強かったようで，二年生となった今でも，生徒は核という言葉にあれ以来敏感になったのとか，いろいろと私に感想を述べてくれます。先ほど生徒は問題意識を持っていないふりをしているというご発言がありましたけれども，私もこの授業を通じてそういう感じを持ちました。つつけばたぶん生徒は答えてくれるのではないかと楽観的な感想を持っております。

今後の課題

最後に，今後の課題について気付くままにあげてみました。レジュメの一番目が実現されれば，内容の精選・授業時数との戦いといった古典的な問題は，少し解消されるのではないかと考えております。それから三番目の点の実現，これは非常に今の時点では急務だと私は考えております。先ほど歴史教育云々という話がありましたけれども，それが取りざたされている今だからこそ，この社会科という教科の意味を改めて考えてみるべきではないでしょうか。最も当面している課

題が，このシンポジウムのテーマにも戻るわけなんですが，このレジュメの二番目の問題だと思います。「現代社会」は専門家がいないといった点，それから内容がありすぎるといった点，もうすでに何人かの先生方が発表されているようですが，多くの教員，そして生徒たちにも不評という現状は確かにあります。またすでに受験からもはじきだされている傾向もあります。けれども，この科目は，現実に行ってみて，うまく教えることができれば，これほど有益な科目はないと実感しております。専門家がいないとか，教材研究が大変であるということで早急に科目の是非を結論づけていいのかということを非常に個人的に大きな疑問として持っております。ここにちょうど集結されたことで，このことを最大の私自身の結論としてこの発表を終らせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

【谷川】　どうもありがとうございました。先ほど申し上げましたように，ここに6名の先生方が発表されましたけれども，まず簡単に質問で答えられるような問題を最初受けてみたいと思います。その後フロアーの先生方の御意見等含めて，この大きな社会科教育の当面する諸問題に迫っていきたいと思います。

（休憩）

Ⅵ．討　　論

【谷川】　ディスカッションの方に入りたいと思います。ご着席のほどお願い致します。先ほど会長の横山先生とお話して，総会よりはこの内容をもっと続けた方がいいだろうということになりました。4時20分ぐらいまではいいだろうとのお話ですので，それまで一時間ちょうどございますので，その間，現在ほんとに戦後の教育界の中で社会科が最も危機的な状況に立たされており，そういう危機の中で我々がどういう発言をするのかということが非常に問われていると思います。ですから司会としてはあまりこちらからレールを引くことはやめまして，もう先生方のとにかく言いたい放題のことを言ってもらうという会にしたいと思います。とにかく，我々が一体何をやったらいいのか，何を考えたらいいのかということをお互いに実践を踏まえて，あるいは研究をふまえてディスカッションしていきたいと思います。

先ほど申し上げましたように，始めにそれぞれの先生方が提案された内容につきまして，質問という形で簡単に答えていただけるようなことがございましたら，いくつか出していただきたい

と思います。その際お名前・学校名，それからどなたに質問したいのかということをちょっとお話の上，ご質問お願いしたいと思います。

【宮薗】　宮薗と申しますけれども，先ほど岩瀬先生とか川原先生は，例えば「現代社会」の問題で生徒が関心持っていないふりをしているが，実際はやればかなり関心を持たせることができるというふうなことをおっしゃられたわけです。けれども，その場合に「現代社会」というのは一応２年・３年に向けての基礎的な内容を中心とするということを考えますと，特に川原先生におうかがいしたいと思います。先ほど核の問題とかそういうことで学習した後，かなり関心をもったということですけれども，そういうふうに関心を持った生徒が，今度は２，３年でそういう自分の問題意識と関連させて，どういう科目を自主的に選択しているのか，あるいはそれとは全く関係なくその後の学習が行われているのか，そのあたりをおうかがいしたいと思います。

【谷川】　それではよろしくお願いします。

【川原】　本校の場合は，先ほど言いましたように総合選択制を採っておりますが，レジュメにも少し書いたんですけれども，学校指定という科目が一応あるんですね。どうしてもゆるがせない部分というものも現実にはあるわけです。それとは全く関係なしに考えてみますと，この核の問題等私がいろいろ行っていた授業に非常に反応を示した生徒たちには，「世界史」をとる生徒が非常に多かったような気がします。広く興味・関心を持たせることができたら，それが現れになるんじゃないかと私自身は思っていたのですが，「世界史」をとる生徒が多かったように思います。残念ながら昨年度の例ですから，それ以上何とも言えないんですが，そういうふうにお答えしたいと思います。

【谷川】　岩瀬さんの方で今の問題どうでしょう。

【岩瀬】　私の場合は，ちょっと質問の趣旨と違うかもしれませんが，「現代社会」をとらえる場合に，今までの９ケ年間の総まとめというような意味あいで授業を考えております。したがって，あまり先の，それぞれの科目への発展につながるということを，本来は考えなければいけないのですが，そこについてはあまり深く考えたことはありません。したがって，どちらかと言いますと，さっきディスカッションというようなことを申し上げましたが，今まで，持っている知識をフルに活用して，それぞれの問題を考える，さらに判断力を身につける，自ら考える力を身につける，という方にどうしても授業中力点をおいたような授業をやるわけです。その場合にやはり先ほど，川原先生でしたかね，指摘がありましたように，なかなか基礎学力あるいは基本的な知識を身につけていないということにいつもぶちあたるということです。だから宮薗さんの質問に直接は答えられませんけれども，そういうふうな感じで授業をやっております。

【谷川】　いいですか，他にご質問はございますか。あるいは今日発表された先生方の中で他

の先生に対するご質問ということでもよろしいのですけれど。特に今日はアンケート調査の報告が二つございまして，「現代社会」に関して言えばわりと近い内容と言いますか，そういうことが出ているように思いましたけれども，古山先生の方で岩瀬先生たちの報告をうかがって何か感じたこととかご意見等ありましたら。

【松本】　先ほどの岩瀬先生の報告と重複するようなんですが，私たちの行いました調査の中でクエスションの18番とかあるいは11頁になりますが，「現在貴校で実践されている『現代社会』は，以下のそれぞれの科目の内容にどのぐらい近いとお考えですか」という質問項目があります。これを見ますと，例えば地理とか歴史なんかとも，もう少し近い内容だと先生方はとらえられているんじゃないかなと思ったんです。やはりこれは予想通りと言いますか，予想がもうちょっと拡大されたような感じなんですが，圧倒的に「倫・社」それから「政治・経済」に近いとお考えの先生が多いわけです。こう考えられて，さらにこの通り実践されているとすると，「現代社会」が２年次以降の選択科目の導入という役割を果たすためには，ちょっと意識のズレというか偏りはまずいのではないかというふうに思います。

関連する質問ですね，12頁の，これはクエスションの19なんですが，ここでの22番，選択科目への導入になっているかどうかという聞き方をしているのです。ここでも，「なっていない」と答える方が11名，「やや」と答えるという方が10名という形で，ほとんどの方が，選択科目への導入としては弱いという認識を持たれているようです。それは，前の指摘とも重なりますけれども，やはり内容面での展開がまだ十分ではないと思います。特に先ほどの文化の面であるとか，それから経済とか倫理に関しても，これは生徒の方の関心が弱いということなんですが，むしろこちらの教師の側の単元の展開の仕方に工夫の余地があるというふうに見ればよいのではないかと思います。そういう意味での展開をもう少し行なうならば，「現代社会」は導入としての役割をちゃんと担うことができるのではないかと私自身は思います。

【古山】　特に質問はないんですけれども，アンケートの内容項目が「現代社会」のきめの細かい指導の実態を知るのにつっこんで聞いてあって，非常に参考になります。全倫研の方でも，もしまた機会がありましたならこれを参考にして，もっと深い実態調査などやってみたいなと思っております。

【谷川】　アンケートの結果等，細かく出ておりますし，かなり量が沢山ございますので，一概にパッと見て判断するのは難しいかもわかりませんけれども，部分的にでも結構ですので，例えばこの調査は，自分の実践とか学校の状況とはちょっと違うのではないかということがございましたら，お願いしたいのですが……。

【牧野】　ちょっと，調査とは関係ありませんけれど，この間，国際理解教育という授業を受

講しておりましたけど，そのときですね，今，海外に約80の日本人小学校があり，そして海外に在住している日本人が約20万人いる。ところがほとんどの日本の人たちが，現地の小学校に入れたがらず，日本人小学校へ入れる。そして，その父兄たちは全部日本を向いていると，それで現地の人たちと非常にぎくしゃくするんだというふうなお話を聞きました。そして今，お話にありましたように，生徒は社会の諸問題に関心を持っていながら持っていないフリをしているというところに，僕はひょっとしたらそれらは根が同じなのではないかと感じるのです。実は生徒は，本当は現代の諸問題についてもっともっと深く勉強したいという欲望があるのだ。あるいは海外に在留している日本の人たちも，実は自分の子弟は，本当は現地人の小学校にいれてのびのびと一緒に暮らさせてやりたいのではないかと思っていると感じるのですね。ところが，そうさせない状況が日本の社会の仕組みの中にありはしないか。つまり，ゆっくりとものを考えている暇がない。だから社会の諸問題について色々と調査，実践するということが教育現場の中で大変難しい。

今，川原さんのご発表の中で，大変素晴らしい教育実践がありましたが，文部省が力を入れて，「ゆとりの時間」を作った。ところが現実には，私も現職ですけれども，殆どの学校ではいつのまにか受験の科目にすり変えられているんですね。ですから私自身も様々な教育実践，ゆっくりした主題学習をしたいんですけれども，やっている暇がない。そういう点で，川原さんは非常に立派な実践をされたんですけれども，岩瀬先生も現職ですけれどもご両人のですね，学校ではそういった時間をどういうふうにお使いになっているのか。あるいは，東京学芸大学の小学校で「ゆとりの時間」の使い方について全国発表されたようなことがありまして，非常に素晴らしいなと思ったことがあります。そこで，もし古山さんの方でご存じでしたら教えていただきたいということです。どうぞよろしくお願いします。

【谷川】　はい，わかりました。それでは，お三名ひとつその点よろしくお願い致します。

【岩瀬】　今，牧野先生の方からご指摘がありましたけれども，余裕がない，ゆとりがないということは私の職場でも同じです。「ゆとりの時間」の所に，完全に受験体制の影が忍びこんできているということは言えると思います。実は私も教育相談という授業を受けているんですけれども，その中で，先生が「ゆとりの時間」は何をなすべきか，ということを言われたわけです。本来なら何もしない方がいいんだ，もう完全に自由にした方がいいんだ，もう今の子どもにとっては，完全にゆとりで，「ゆとりの時間」の有効な活用である。「有効な」という言葉が付くと何かさせようとする，本音は何もさせない方がいいんだ，ほったらかしといたほうがいいんだということをおっしゃったんですが，なるほどな，と思いました。まあ私の勤めている学校では受験には使ってはおりません。体力養成に使っております。全校掃除というふうな形で使っておりま

す。それがどういうふうな教育効果があるか，プラスなのかマイナスなのかは分かりませんけれども，全体的には牧野先生が指摘されたようなゆとりではなく，「ゆとりの時間」は設けた事によって結果的にむしろ，かえってゆとりがなくなっているというふうに思います。

【谷川】　どうぞ。

【古山】　私，学芸大附属高校赴任二年目で不分明なもので，附属小の実践について残念ながらわからないんです。申し訳ありません。附属高校そのものにおいては，「ゆとりの時間」，というのはどういうわけか見当たりません。その代わりと言ってはなんですけど，かなり学校行事の多い学校です。各教科においていろいろな野外学習をやっております。社会科であれば1年次の「現代社会」実習，2年次の「地理」学習，理科であれば「地学」学習ということで城ケ崎へ行って地層の実地学習とか，あるいはプラネタリウム見学，科学博物館見学とか，そういうのをやっております。あといろいろ，体育大会，校内球技大会とか，又，国語科であれば，現代劇観賞とか，古典劇観賞とか，かなり行事の方は力を入れている。まあ，そんな感じです。

【谷川】　じゃあ，川原さんお願いします。

【川原】　多分，「ゆとりの時間」というものが，埼玉県では学校裁量時間ということで，行われてきたと思うんですけれども，うちの学校では，ロング・ホームルームになっております。ですから週二時間，ロング・ホームルームがあります。ホームルーム担任としましては，ゆとりがなくなる時間になってしまっているのですが，一応，学校行事に使用したり，あと，ホームルーム活動を行ったり，生徒自体でいわゆるリクリェーション的な事をやらせたりとかして使っております。

【谷川】　もう少ししばらく，いろんな意見を出していただきたいと思います。関係なくても結構です。後で方向性を考えますので，出していただきたいと思います。

【牧野】　この間，新聞に文部省の方で「国際理解」という科目ができるとか，できないとか。それが「地理」とか，あるいは「現代社会」とかね，いろんな科目とかなり重複するというようなところもありまして，たぶん，なしになったと思うんですけども。あの，そういうことを言われてみてですね，私，先ほど岩瀬先生も言われておりましたが，日本とソビエトですね，あのモスクワの人50人と，ウラジオストックの人50人と，日本の人50人，テレビで討論をやりましたね。テレビなんとかブリッジと，私もついつい見ておりました。

けれども，僕はずっと地理をやってきましたけど，地理の中で外国の人の心をどうやって捉えてきたかというと，実は「ここが工業地帯で，ここは…」ということをやってきたんだけれども，心の世界をどうも教えてこなかった。これはまずいとテレビを見ながらつくづく思ったんですね。そうしたら，「現代社会」という科目の中で，外国の人のものの考え方とか，こういった心の世界，

日常生活の文化については，ソビエトの人は日本人の生け花とか茶の湯とかはよく知っておりますね。

ところが我々はソビエトをどう知っておるかと言いますと，ロシア民謡か，あるいは政治の世界に出てくる非常にこわもてのソ連かというふうになってしまうんですね。民衆の日常の生活をほとんどしらないんですね。あるいは心の世界をほとんど知らないんです。そこで，地理の世界，あるいは「現代社会」という科目あるいは歴史，「倫・社」と，今ある科目をめくってみますと，いろんな思想は一杯あるんだけれども，日々の生活と心といった部分，あるいは文化といった部分が，やっぱり欠けているなと，私つい思ったんです。ですからこの「現代社会」という科目の中でも，そういった事，心の世界みたいな部分をですね，やっぱりどこかで作ったら良いんじゃないかな。これは，私の希望的提案です。以上です。

【谷川】　はい，ありがとうございました。他に，ご意見ございましょうか。…はい。

【宮薗】　あの，先ほどの事と，ちょっと関連するんですけれども，このアンケートの12頁を見ましても，その23番に，生徒の問題意識が希薄であるという意見が見られるわけです。けれども，先ほどの先生方の意見を参考にしてみますと，果たして問題意識が希薄と言うよりも，何となく漠然と問題があるという事には気づいているんだろうけれども，それが自分にとって，あるいは社会にとって，何が問題なのかという，ある意味での事実認識，そういうことがなされていないのではないかなという気がするんです。ちょうど田辺さんが，中学校であまり，基本的な学習がなされていないと言われましたが，そうしますと中学校と高校の関連なんですけれども，中学校はある意味で基本的な知識を重視すれば良いのかと，問題になってきます。さらにまた，小学校と中学校では，生徒の変化がかなり大きい。やはりそういう意味で小・中・高の関連性をもう一度，明確に捉え直していく必要があるんじゃないかなという気が，私自身してるんです。例えば発達段階を法則的に捉えるというよりも，その段階，段階でどういうことが課題なのかという事を，やはり現場で押さえていく。そういう実態を把握していく必要があるんじゃないかなと思います。

【谷川】　小・中・高の関連をどう図っていくか，その中で「現代社会」をどう位置づけるかという問題，それからもう一つは，同じ学校の中でも，あるいは同じ学級の中でも，非常に学力の差が激しいというような事がございましたね。そのような実態の中で，どんなふうに考えていったら良いのか。先ほど中学校の例で田辺さんに少しお話いただいた後，小・中・高の関連性ということで関心を持っていると，私の隣のアシスタントのお二人がアドバイスしてくれていましたので，２，３の人にお聞きしたいと思います。高瀬久美子さん，それから三野輪敦さん，平岡さん，その三名の方に，ちょっとご意見ありましたらお伺いしたいと思いますのでよろしくお願

いします。

はじめに，田辺さんから，今の中学校は特に小・中・高の真ん中にあるわけでして，上を向いても下を向いても闇だ，というようなことでは，大変困ると思いますけど，その辺の所をどう突破するのか，何か見通しの様なものをちょっとお聞かせ願えればと思います。よろしく。

【田辺】　学力的な差というふうに前から捉えられてきてはいたのですけれど，そもそも，その学力の差がつく事自体，小学校へ入学する段階で，例えば一斉授業に適応できるできないという問題が既にあるんですね。小学校の入学式で既にじっとしていられないとかね，去年ですと，小学校は，うちのすぐ近くの小学校はクラス５，６名はいるものですから，そういう所から積み重なってきている問題なんで，小学校で教えてないとかいうわけではなくて教えてはいるわけですよ。だからできる子はものすごくできます。もう，全部身につけてます。だからやってはいるんですね。授業はしているんです。でも，それについてこられなかった，うまく乗れなかった子というのが出てきているわけです。その差が非常に激しくなって，全体として，最低線をどこで押さえていくかという問題になっちゃうんだと思うんです。中学校，今，現実にうちは何をしているかと言うと，最低限，まずはここまでは全員にやらせなくてはならない。そこで，課題を出してやらせる。その後プリントのような課題であれば，余力のある者はこっちもやるというのをつけておきまして，回りながら余力のある者はこっちまでと，最低限度は全員はここまでと，見て歩くというぐらいしか工夫が今のところないんです。こう削っちゃって教えてないというわけではないんです。中学校としても，やっぱりこれは知っておいて貰わなきゃいけないとそういうものまで削っては絶対にいません。で，まあ，それぐらいしか答えようがないんですけど。

【谷川】　どうですか。よろしいですか。

【宮薗】　その場合，例えば，ついてこれる子はついてくると，完全にマスターしているっていう事で，その他には，どうしてもそれに乗り切れない，そういう生徒が多いという事なんですね。けれども，それは，小学校入学前からそういう背景があるっていうふうに捉えてしまえば，結局そういう状況にある子どもは最後まで結局ついてこれないままになっていくんだ。しかしついてこれないという事の原因は何なのかなというところを，押さえていかないと，「ついてこれないのが大勢いる。だからこういう現状だ。」という，そのままではやっぱりちょっといけないんじゃないかな，と思うんです。その辺をどういうふうに考えていらしゃいますか。

【谷川】　では，簡単にお答え下さい。

【田辺】　要するに勉強するという以前に，いろいろ悩む事なりね，もう，本人が悩んでいるという自覚の下に悩んでいればまだ良い方でありまして，苦しんでいるんだけれども，悩んでいるという自覚がない。ただ，いらいらするという状態になっちゃっているというのが結構いるん

ですよ。しかし，それを解決してやるというのはもう，一斉授業の中の問題ではないんですね。それを解決してやらない限りだめなんですよ。で例えばですね。ものの言い方でもこういう言い方なら聞けるけど，他の言い方をされたら，もう否定してしまうなんていう子で，数学の先生の言い方では理解できないけども，担任が全く同じ事を教えると，あっという間に理解してしまうとか，そういうものが沢山あるんです。そういう例，沢山あります。よろしいでしょうか。

【谷川】　その問題については，そのくらいにしたいと思います。私の推測するには，田辺さんがやっていらっしゃる小岩周辺の地域の問題もあるかと思いますけれど，そういう地域性の問題も加味して，実際に行なわれますので，そんなことを今私は感じましたけれども。要するに学力の問題と社会科の問題というのは，例えば英語とか数学ができることと社会が好きか嫌いかっていうのはかなり違うファクターがはいって来るのではないかと私は思っておりまして，特に「現代社会」みたいなもの，英語，数学がよくできる子が「現代社会」が得意かというとそうじゃない面もあるかと思うんですね。その辺の所もふまえて下さっても，ふまえて下さらなくても結構なんですけれども。どなたか。今，問題になっておりましたのは，「現代社会」の位置付けみたいな問題ですけど，それに関連がなくてもよろしいのですが。

【久保】　茗渓学園の三野輪さんがいらっしゃらないので代わってということになりますけども，今問題になっていることは，おそらく中学と高校の社会科教育ということで，中・高併設されておりますから一貫性とともに，次のような点に気をつけております。それは何かと申しますと，中学生の場合には集団として行動できるような，そういう能力を身につける，あるいは生徒間どうしの交わりといいますか，そういう交わり能力といったものを学校行事などを通じて身につけるといったものです。こういう段階になりますと，それが個人の問題として個人がどのような能力を身につけるかということです。ですから，レポートなども班を単位としたレポートではなくて，個人を基礎としたレポート形式の課題などが多くなります。

また公民の授業と「現代社会」の教育との関連性なのですけれども，一つは公民との重複をなくすということで，現実的に教科書の採択という問題があると思います。公民の教科書と，それから「現代社会」の教科書とを違う教科書ではなくて，一つの教科書の会社であるならば，重複したところはたぶんないであろうというような前提の下に立ちまして，教科書を一つの会社に絞るというようなことですね。それから「現代社会」の授業でもって，内容が多岐にわたりますから，その中でどういうふうに教材を精選していくか，講義の内容を絞っていくかという問題があげられますけれども，その中で特に私の場合には「現代社会」の授業の中では公民であったところはある程度押さえまして，もっと「現代社会」らしいといいますか，例えば人類と環境の問題，或いは人口問題，エネルギー問題，そういったところ，そしてまた後半の方になります文化の問

題，現代青年の諸問題，そういったところに焦点を絞っていきまして，それを問題単元化すると，その単元化したところを切り口にしながら進めていくというような授業をしております。

その他，教科外の学校行事として，例えば，私ども高校１年生のことを４年生というふうに呼んでおりますけれども，その４年生の学校行事として筑波山の方に巡検というのがあります。その巡検には人文学的な分野と科学的な分野というように分かれておりまして，人文学的な分野では，例えば地理的な，筑波山の方の土地利用の様子，時代とともに変わっていく様子を調べて，その中で地元の農家を営んでいる方のお話をじかに聞いてレポートを出すとか，あるいはまた，歴史的な分野でも，そこに生きる人々の考え方の違い，世代交代，そういったもののお話を聞いてみるとか，そういうことをやっております。

また，５年生になりますと，将来に向かって進路の問題がありますが，この進路をなるだけ受験体制とは別に考えようということで，言わば，大学生にあたる卒論に似たような形式でもって，自分が将来になりたいような職業，あるいは自分が大学に行って専攻したいような分野を自分で勉強する。それでもってある程度のレポートを書いてもらうというような，そういうことをやっております。以上です。

【谷川】　ありがとうございました。ご自分のおっしゃりたいこと何でも結構ですのでおっしゃっていただきたいと思うんですけども。ございましたら。

【井川】　MCの井川と申します。先ほどから「現代社会」の中で特に言われていたみたいなんですけれども，これは私の専門ではないから，私は「地理」だから，「政経」だから「倫・社」はわからない，そういうような観点から「現代社会」をとらえている傾向が多いということがアンケートなどからうかがえると思います。同じように中学校でも一応公民的分野，歴史的分野，地理的分野に分かれているようですけれども，中学校ではそれぞれの分野を担当する際に先生方が公民的分野なら公民的分野だけを何十年もされているのか，それとも自分の担当した学年に沿ってそれぞれ変わっていって，地理，公民，歴史をやっていかれているのかどうか，そのような観点からのお話をうかがいたいと思います。

【谷川】　実態を知りたいということですね。

【川井】　はい。

【谷川】　中学校の先生は，田辺先生しかいませんか。他にもいらっしゃれば実態を。フロアーでもしどなたか中学校の先生がいらっしゃれば。

【田辺】　他の学校の実態を知りませんので。でもたいていは中学は１人でどの分野でも所属した学年と，あとそのときの時間数などで場合によると地理，歴史，公民すべてにまたがってやるような場合もあります。やったことあります，３学年全部。

【谷川】　はい，どうぞ朝倉先生。

【朝倉】　…(不明)…全国平均で三教科，社会と体育と数学とか，そういう意味です。まして社会科の中の分野別なんていうことは中学校の全国的な傾向では大規模な都市の大規模な学校を除けば，三分野全部やるのが多いようです。三分野でなくて三教科ですから，平均が。以上です。

【谷川】　中学校と高等学校ではやっぱり教員養成の問題もありますのでだいぶギャップがあるということが事実であるわけですが，他にいかがでしょうか。

【中島】　MC 2年の中島といいますけども，今の金井君の質問にもちょっと関連するんですけれども，今は中学校の立場からでしたけれども，今度は高等学校の立場からちょっとお伺いしたいんですけども，先ほど先生方から「現代社会」が1年で4時間ということですと一人で多数の学級がもてないということ，それから川原先生からは，「現代社会」の専門家がいない，あるいは内容が多すぎる，それから教材研究が大変，ということを指摘されました。また岩瀬先生のアンケートの結果の10頁あたりをみますと，「『現代社会』に関して他の担当者とどのような協力体制をとっておられますか」，このQ6をみますとどうも教材研究や授業の公開などについてほとんどしていないというかなり否定的内容が多いようでして，また，その下の理由でもこれまた個人の担当によると思うんですけれども，かなり個人個人によって内容が異なることになりますし，またそうしますと，その取り組む先生の姿勢というものが大きく影響してくると思うんです。そうしますと，その個人個人の先生方によってその内容がまた大きく異なってきますし，それについて生徒の興味・関心もまた異なってくると思われます。また，Q18の方で「現代社会」の内容に関してさきほどでましたけれども，この内容に関しまして「現代社会」が「倫理」や「政治経済」に近いということになりますと，その「現代社会」の担当ということが，これは私の個人的な印象なんですけれども，「倫理」あるいは「政治経済」の担当の先生方が担当するという場合もかなり多くなってくると思われます。そのあたりに先生方，それから現職の先生方もたくさんおられるようなので，実際に現場ではどのような状況なのか，実際に学校では他の英語とか数学，他の科目との差，その中での社会科の時間数の調整，それから社会科の中でも「日本史」「世界史」「地理」，それから「倫理」，「政経」，その科目間ごとの調整が大きな問題となってくると思うんですけれども，そのあたり，他のそれぞれの担当の先生方で「現代社会」に対してどのように考えておられるか，またその調整のしかた，それから先生方の個人的なお考えでも結構ですのでその協力体制とか，そのあたりのことをお伺いしたいと思います。

【谷川】　時間が10分足らずになってきましたので問題を二つに絞らせていただきたいんです。一つはアンケート調査にもありましたように，今中島君から話がでましたように，学校でどのような教員問題の組織，とりあえず「現代社会」でいいのですけれども，それをめぐってどういう

形で協力体制をつくれるのか，あるいはつくれないのか，そのへんの問題はかなり大きなネックになっているように感じますので，その問題が一つと，それから最後にやっぱり「現代社会」の内容的な問題点ですね。目標が不明確であるというような問題がでておりますので，その問題をちょっと後半に回してみたいと思います。実際に「現代社会」をつくられた先生方もいらっしゃいますので，そういう先生方の御意見も伺いたいと思うのですが。とりあえず「現代社会」，その主要五教科のうちの不要二教科と言われている社会科なんですけども，その中の「現代社会」というものをめぐってどういう協力体制ができるか，もしこのフロアの中に，実際にそういうことを試みて，こんな成果が多少でもあったというような報告がありましたら，ぜひお聞かせ願いたい。暗い話ばっかりでなくて，そういうような新しい試みが出てきたというような報告がありましたらばお願いしたいと思います。…フロアの先生の中から…特別ございませんか。なければパネルの方の先生から今のような問題をご報告願えればと思います。

【岩瀬】　今の件ですが，協力体制の件です。これは4人でアンケート調査を作成したのですけれども，特に私がここは聞きたかったところなので責任上一言述べたいと思います。私は現在二校目ですが，ちょうど今教諭として11年目ですけれども，どういうことをやったかといいますと，このあいだの筑社学の時にもちょっとしゃべったんですけれども，私は今の職場では35歳で最年少です。最年少で主任という名前の小間使いです。その中でですね，どこから手をつけられるかということなんですけども，私が考えたのはやはり授業の公開なんですね。そして，一か月，二か月とかなり精力的に，結局僕が5回やる間に他の先生が1回やるというくらいの感じで，一応立場上，言い出しっぺということでやってきたんですけれど，その中から一人でも二人でもいいから，やっぱりこう，あ，おもしろいなあと，何かわけがわからんけれどもおもしろいなあというような反応が，特に年配の先生，年配というとおこられますね，ええあのベテランの先生の方から出てくれば，ここで一つの進歩と言えるんじゃないかと私は思いました。

で，私がこちらの筑波の方に，今籍を置いているわけですが，実は今度こういうシンポジウムを提案するということで，今どうなっているんですかと聞いたら，実は今まで一番否定的な立場におられた先生が，今先頭を切ってやられてるということで，非常に嬉しかったんですけれども，一つのささやかな成功の例です。

【谷川】　はい，ありがとうございました。他にそういう事例，ささやかなものでも結構なんですが，ございませんでしょうか。

なかなか，学問分野が違うと，もう本当に意見がかみ合わないというのは，私も別の大学におりましたけれども，その中でひしひしと感じておりました。高等学校の場合でも，やはりそういう同じ状況があるんだろうと思うのですが。

【朝倉】　「『現代社会』教育特論」はなさっているんですか。

【梶】　ええと責任上ですね，要するに，私たちの社会科教育コースは，これはご存知の方が大部分だと思いますが，今のマスターコースにとってみると一番最初に出発したのが障害児教育専攻です。一年遅れて教科教育が出発し，社会科教育コースがもう一年遅れて出発した。この辺に，だから社会科という教科の，実は専門諸科学との関係の難しさが実は出てるんですよね。

体験的に言いましても，この私たちのコースが，マスターコースの中で一番遅れてしまった。まあ言わば落ちこぼれたわけです。そういう形で出てきたというところに社会科という教科と専門諸科学との関係の難しさが如実に出ているわけなんです。

ところが，まあおかげ様で，出発をして今日まで来て，今，朝倉先生からご質問，いや朝倉先生もおやりになっていたんだけれどね，変わりはないんです。ないんですが，要するに体験的に，学生諸君たちわかってるとおり，「現代社会特論」という授業科目を，あれは全国で唯一だと思うんですよね。だから，ここを出ていった諸君たちが，今日皆さんの意見を聞いていて，私もああそうかって納得する面があるわけなんですよね。それだけに，逆に皆さんたちは現場へ行って苦悩しているんだと思います。

というのは，もう40年来私が「倫・社」と「政経」を直接担当させていただいたときに，全国もういやおうなしに回った際に高等学校の社会科ご担当の先生方の状況が，結局もう全国あらゆる大学からご出身の方たちが，結局いわば小・中と比べると，私の観点から言うなら，教科教育という観点からのお勉強をね，ほとんどなさってきていない。で，それぞれの専門，学問を中心に，それでまあいいと思うんですよね，いいと思うんですが，今になってみるとね，もう少しそこを，というその辺を実は朝倉先生たちとね，このコース出発にあたって授業科目の中に私たち工夫したわけです。つまり，共通科目の取り方とかね，なぜ「現代社会特論」だけは１年生必修，中にはね，何でこんなもの必修なんだと考える諸君もいたかもしれませんけどね，それを追ってやったのはそうなんですね。

ところが動き出してみて，実は反省する一つは，結局１学期は私がトップバッターをやらせていただいて，それから２学期・３学期というものを朝倉先生・横山先生にリレー式でやっていただいて，という形で今年の１年生諸君は今は確かハリー・レイ先生ですね，やってくださるのは。

【谷川】　私も一緒に。

【梶】　ああ，すみません，ああ，一緒に。

というわけで，僕はだから「現代社会」を君たちがとる場合には，大学においてね，いろんな方から，いろんな観点からいろんな見方というものを，してもらうのもいいんじゃないかというような主旨でああいうふうにしているわけです。「現代社会」というものを設けてるというのは，

もう全国で唯一だと思うんですよね。だからそれだけに今ちょっとね，朝倉先生も実は今度の「現代社会」のチーフで，朝倉先生は今度の高等学校社会科全体の総まとめ，大変だと思います。

本当にもう40年来の私の体験で常々皆さんにお話してきたように，高等学校のさっきの川原さんのここに科目主義ですよね，もうすごいもんですよ。科目のエゴでね，もうだから最後はなりふりかまわず，自分の直接ある科目を必修にしろと，なりふりかまわず自分の科目だけ単位数余計によこせとね。ただこれ無理はないんです。要するに予算の分取りと同じであって，例えばある科目が指導要領の上で，はっきりと必修に保証されれば，大学のそれと関係の深い研究室からの出身者の就職は，目に見えて保証されるわけですから，これから落ちこぼれてしまった研究室の卒業生は悪戦苦闘するわけですよ。その悪戦苦闘の歴史というのが，まあ私もその関係者の一人で古山さんと似てるんでね，要するに戦後社会科が生まれて，大学において倫理・哲学を専攻した学生は長い間浪人期をたどる。私もその一人です。私も倫理の出身者ですからね。

だって倫理の出身者が，自分の専門を生かす科目がなかった。それがあのご承知のように小・中学校の道徳時間の特設，これは教科じゃありません。さあ，高校も道徳教育を強化しようっていう時に，そこがこう合体いたしましてね，これがいわゆる社会科社会の中に倫理的内容が初めて登場してきて，さて教科書ができた。その教科書の終りの方に指導要領に示してあったと同様，同じように倫理的内容をつけ加えた。ところが全国の高校の実態を調査したら，そこはもう皆さん，割愛なんです。敬遠なんです。

もう一つはイデオロギー的にありました。つまり倫理的な内容を持ち込んだのは，道徳教育の教科ということで，小・中の道徳の時間が猛烈に，これは真正面から朝倉先生，体験なさっているわけだけれど，もう日教組と文部省が四つに組んで，この小・中の道徳時間特設をめぐって血を流したわけです。大変なことです。戦後の日本の教育史において，子どもたちの道徳性育成の中心となる道徳という時間が警察官によって守られて，警官によって守られて講習会が開かれ，そして，日教組と文部省の係りの人が取っ組みあいをやって，という事実が戦後の我が国の教育史にあったということを，諸君たち，やっぱりね，知っておいてもらって体験的にはまた，その時生々しく体験した朝倉先生の，特別講義であっていいと思うんですよね。私もその時に，間接的ながらそういう風に感じていた。ところが，今度それを高校へ持ってくるときどうするか，高校の場合は，小・中みたいな道徳を，時間の特設じゃとても無理じゃないか，そこで社会科社会の中に倫理的内容を入れたんです。入れたけれども今お話ししたように，全国の高等学校は，イデオロギー的にみてもそこを故意にカットしている。教科書にあっても，実際授業に取り上げない。それでもだめだ。

次に「倫理・社会」の独立です。独立の科目にしなくては，とても駄目なんです。で，独立の

科目にすると同時に，これを指導要領の上でも必修で保証する。その段階ふんでいって，40年来私が倫社と政経を担当させていただいたんです。私の体験を回顧しますとどうなったというと，全国でもって必修のはずの「倫理・社会」がね，二重帳簿。時間割に「倫理・社会」という科目は出ているんだけれども，実際そこでやられたのは「世界史」であり，「日本史」であり，まあ受験にとって一番有効な科目が出てくるわけですね。

だから，教育大で，皆さんにお話ししたことがあると思いますが，教育大で哲学を出た方で，私のところで教育実習をやった方が関西の有名な進学校へ行った。彼から，私は文部省へ行った時に手紙をもらった。何が書いてあるかと思って見たら，「先生，いよいようちの高等学校も来年の四月から，『倫・社』は看板だけになります。これを何とか行政の手を通して，先生ならできるでしょう。」と。ぼくはそんなことできっこないんだけど，「何とか県の方に指示を与えて，こういう二重帳簿にならないようにしてください。」僕は，私のところで教育実習をやった方だから，はっきり言えたわけで，悲しいよってね。そんなことをなぜ行政の力に頼まなくちゃできないんだ。どうして現場の教師はもっと主体性をもって教育の問題を考えることができないんだ。君は自分たちの職員会議でその高等学校の全先生方に対してね，「倫理・社会」というものが子どもたちの人間形成にとっていかに大切なものか，これをちゃんと理論的にも説明し，もう一つはさっき，岩瀬先生が言われました。

自分の「倫・社」の授業を見て下さい。毎時間，毎時間ね。特にあのホームルームご担当の先生方は，時間があいていたら私の「倫・社」の授業を見てください。そして私の「倫理・社会」の授業というものと，各先生方のホームルームの指導というものの関連をね。指導要領にちゃんとうたっているんだ。「倫理・社会」，必修の「倫・社」とホームルーム指導の関連をかかえてやっていくというところが皮肉なんですよ。全国の，指導審の方が集って，私がそれを申し上げると皆さんにやにやと笑ってね，先生，そんなもの，指導要領の上の言葉だけですよ。高等学校の現場は，ホームルームとある特定の科目の指導の関連を，なんてそんなことは全然関係ありません。各先生方はみんなご自分の専門の中に，殻に閉じ込もって，そして，こつこつご勉強なさるし，また中にはそれを基礎にして，さらに大学の教師になろうってね，励んでる方がいらっしゃるわけで，とてもその小・中とは違うんです。もう，これは40年来の話なんですよね。

そういうことに対して，「現代社会」が生まれたっていうのは，そういうことに対してそれを破りたいんだっていうことが一つあったんですね。高等学校の教育界の現場のその問題を，何とかしてこの「現代社会」というものを，一つ突破口にして破りたいというものがあったわけです。

だからここでまとめていただいたアンケートの，この１ページの実態調査のね，ここにさっき岩瀬先生が話されたはずですが，「現代社会」，これ四つの線が出てるでしょう。で，これはどこ

から克服していくか下に書いてあるんですけど，これ，逆なんですよ。この問題を「現代社会」で何とか突破できないかっていう使命を，「現代社会」は実は担ってたわけです。いわく受験体制は，これはどう考えたって否定はできない。現実問題として。できないんだけれども，そういう苛酷な教育状況にあって何とかして高校の子どもたち，多様な子どもたち，この子どもたちに教科・科目の学習を通して生きがいをね，見出してやりたい。そのためにこの「現代社会」っていう新科目でできないか。これが一つですね。

それから教師集団，考え方の違い，たこつぼ式高校の現状，みんなたこつぼに入ってしまってお互い全然やらない。それを何とか打開して，そういうことをやるためには，協力体制を作っていくためには，抽象論じゃ駄目だからこの具体的な「現代社会」というものでもって，まず社会科の教師がそれを作っていこうじゃないか。それから，生徒集団，これについても子どもたちが自分たちの課題として学習に取りくむ。知識の注入じゃなくて，そういうようなことを「現代社会」でやろうじゃないか。教育行政自身，それをよく考えたんです。だから逆に，そういうことをむしろこれからしっかりと考えていくという，また努力していくということが必要なんじゃないかな。

ただ私が諸君たちに一つお願いしたいのは，君たちは確かに「現代社会特論」をはじめ，私たちのあのコースのカリキュラムが，いわゆる教員養成ということを考えて作られているわけです。ですから，そういうふうな観点でもって，現場でもっていろいろ発言するでしょうけれども，おそらく，さっきから話題が出ているように，多くの高等学校の先生方は，こういうコースを取ってきてないわけです。だからそこにずれが出てくるんです。だから，岩瀬先生ご自分はもう教育を出られて，そしてずっとまた，大学院でも勉強なさってきているからそういうものをちゃんと持っているわけですね。だけど他の専門中心の先生方との間に，いろいろな異和感があって，苦労なさってきたと思うんですよね。

だから君たち，それをおごってもらっては困るんで，おごるのではなくて，何とか，そういう先生方と手を組んで，そして日本の高等学校教育のあるべき姿を求めていくための努力を，やっていただきたいと思います。さっきの川原さんのあれなんかもね，ぼく本当にいいなと思いますよね。そして，だって「現代社会」をああいう形でやったら「世界史」の選択が増えるっていうんですよね。ぼくはそこがおもしろいと思うんです。

【谷川】　内容的に面白いと思ったのは，この岩瀬先生たちのやられたものの二枚目のいわゆるクロス分析となっている，Ｑ５についてです。生徒の関心と教師の取り扱いということで，このabcdというのは，とても面白いと私は思いました。aというのは，両方とも関心を持っているということですね。文化面というのは，生徒は関心もっているんだけども，意外と教師は取扱

いが薄いとかですね。あるいは今日，古山さんのあのレポートにありました倫理の問題は，どちらも関心が薄いと。そういういくつかの四つのパターンが現われてまいりまして，この辺などとっても面白いところなんですが。私がちょっとお伺いしてみたいのは，こういう内容の結果が出ることが，当初，「現代社会」を作られるときに予想されていたのかどうかということなのです。ちょっとひと言だけ教えていただけますか。

【梶】　今度のあの「現代社会」の場合，私は外部委員だったんですね。もう中じゃないんですが。で，今，振り返ってみますと，今の「現代社会」の指導要領が示している内容，つまり第一の「現代社会の諸問題」，第二の「現代社会と人間の生き方」，あれも，もうぎりぎり苦しまぎれの内容の示し方なんです。だからあれが決してね，唯一のものじゃないんです。当り前のことですよね。だから私，さっきから御意見がずいぶん出ていたと思うんですが，むしろ「現代社会」の中味を，抜本的に改善する。今度，朝倉先生にも是非そこを，中心でお考えいただきたい。僕は複数の「現代社会」の，指導要領が示すならですよ，僕はあの授業で確か言ったはずですが，私は外部委員として，「現代社会」の場合は，目標と取扱いだけにすべきだ。内容は指導要領で示すべきじゃない。内容，つまりそして内容をさらにそれを補強していく教材は，まったく現場で。だって高校の実態が，大変多様なんだから，それに対応した形でやるというのが，「現代社会」を生かしていく主旨なんですよ。だから私は今度の，他の学会からの要望の中には，「現代社会」を必修，と同時に，「現代社会」は評定やめて下さい。５・４・３・２・１なんて作ることはやめて下さい。あれで子供たちの勉強が駄目になってしまう。評定なしなんだ。評価は必要ですよね。だけど，評定５・４・３・２・１のレッテル貼りはやめてくれ。僕はあれだけの，教育課程の中にあって，ある教科の中の，しかもその教科を構成してる一科目ぐらい，ぜんぜん評定から解放された，のびのびとした学習を保証されるものがあったっていいじゃないかと思うんですよ。

そういう抜本的な教育課程の改定ができないくらいなら，やる必要はないですよ，教育課程の改定。何回やったって駄目ですよ。じゃ，そんなことやったら教師は，遊んでしまって，評定もいらないような科目の授業なんかどうでもいいようになるっていう心配が，従来の教育行政からいうとあるわけです。これはしかし，現場の先生に対する不信感です。だから今度はひっくり返せば，そういうふうになったときに，われわれが本物の，授業ができるのかどうか，ここに僕は全国の教師が試される具体的な問題が出てくると思うんです。だから今，私たちはなんとかして，指導要領が今までのような形で，これ一本だという形をやめてもらいたい。むしろ指導要領は複数を示して，そして全国的に比較研究をしていくようにしてほしい。そして場合によれば，ある科目について，ここで言うなら，「現代社会」なんか評定をやめる。それで本物の授業というものが，できていくのかどうか。そこで初めて，私たち教師集団というのが，自分たちの力量も問

われるし，自分たちの教職としての責任を，具体的に問われていくと思うんです。

今までのああいう形だったら，教師のうんぬんということ，主体性うんぬんとか，批判されても，われわれだって言い分ありますよね。しかしもし今度，そういうことしてくるならば，われわれは本当に立ち上がらなくてはいけない。その際にやはり，ここの学会で学んでるお互いがやはり先頭に立っていく必要があるのではないかと思うんです。だから今の「現代社会」のとくに内容の位置が，あまりにも，「政治・経済」に似すぎてるんです。あれは抜本的に改善する必要がありますね。

そしてむしろ，二番目の「世界の文化と文化交流」，「日本の生活文化と伝統」，ここを僕は個人的に言うと充実すべきだと思うんです。充実しなかったら，われわれが日本の生活・文化というのを学習対象にしていると同時に，外国の生活・文化ね，今は本当に——私の弟も今，カルカッタで日本人学校の校長をやってますけれども——結局どんどん日本人が外国へ出ていくのですけれど，みんな心ならずも，日本の方に目が向いて，という実態があるので，これでは駄目だといういことが，いろいろと，からんでいると思います。

【谷川】　朝倉先生，ここでひと言，内容の問題について。

【朝倉】　梶先生の言うことをよく聞いて努力致します。(笑)ただし，評価をしないというのは，命がけなんです。

【梶】　評価はするんですけど，評定しないわけです。

【朝倉】　困りましたね。私は「道徳」の時間を作ったときの担当の調査官です。あれを，5・4・3・2・1をつけると言われたときに，命がけで辞表をたたきつけてやったのですが。それで領域ということにしてもらったのです。昔の修身と同じだと考えていたわけですよね。修身が甲乙丙丁で，乙や丙がついたら，嫁さんにもらい手がないくらいだったから。会社にも就職が難しいという。まさに道徳に点がつけられたら困ると。上からはつけろと言う。つけられないと言う。これは調査官としては命がけですよ。靴磨きしても，女房を食わせるから，という，本当に。

だから評価はするけど，評定しないという，私にはちょっと難しいんです。今の調査官がそれだけできるかどうか。敢えてそういう学習指導を作るとき非常に難しいのは，理想と現実をどこでマッチさせるかという苦労があるわけです。一歩進みたいんですけれど，半歩で止めざるを得ない。しかしそのときに，私の今の立場でありがたいのは，今日一日勉強させていただいて，「現代社会」という分科会に私，属しておりますけれども，非常にいい勉強になりました。勇気も湧いてきました。

梶先生がいてくれるから，私は，おい，「日本史」あんまりガーガー言うな，「倫理」もひっこめ，「地理」もちっとおとなしくしろ，と言うのが私の仕事らしいんですが，これがまた川原さ

んがおっしゃったように，容易な仕事じゃない，と思います。どうぞ，老骨に鞭を打って，あと何年か，頑張るつもりですが，若い諸君のバックアップと，先生方の御支援を平にお願いする次第でございます。

【谷川】　最後に，パネルに出ていただいた先生方にひと言お願いすればいいんですけれども，時間が過ぎておりますので，吉田先生に，今までの討論，お聞きしてお感じになった点，まとめということではございませんけども，ひと言お願いしたいと思います。

【吉田】　最初に申しましたように，教育課程審議会の中間まとめを受けまして，そして新しい問題点が出てきたわけでございます。今日，「現代社会」が中心でございましたので，私が最初に申し上げたうちの，例えば，小学校低学年における生活科の問題とか，あるいは，小・中・高を通じて，公民科分野に関する内容の精選とか――この問題はあまり出ませんでしたけども――しかし，このシンポジウム全体が最初の予定では，高校の「現代社会」の選択科目への移行を中心とする諸問題，それからそれが現場においてですね，「現代社会」がどういうふうに受けとめられ，そしてそれがどのように発展的に継承されているか，そういう問題が非常に多く出てまいりました。そしてできうれば，この必修から選択に移行する問題についても，もっと触れていただきたかったわけでございますが，時間の関係でそこにはいけませんでした。しかし，この問題は，今後はさらに，継続的に考えていきたいと思います。ごく簡単ではございますが，総括させていただきます。

【谷川】　ありがとうございました。大変不馴れで，まとまらない司会になってしまったのですが，シンポジウム提案者の先生方を始めとしてフロアーの先生方のご協力を得まして，何とか三時間余り，やってまいりました。一応これで，本日のシンポジウムを終了させていただきます。本日のために準備され，有益なご提案をいただきました各先生方に心から御礼申し上げます。

（拍手）

「現代社会」の現状についての実態調査

この調査は筑波大学社会科教育学会会員のうち，高等学校教員を対象としたもの。質問項目は全倫研調査報告等をもとに，岩瀬・塚原・藤沢・松本の４名によって作成された。発送時期は1986年12月下旬。回収時期は1987年１月中旬。発送数91のうち，返送数33で，回収率は36.7%。回答者の年齢分布は20代から30代始めが最も多く，地域は関東地方が中心である。

ここにのせた調査結果は，もとの調査用紙に結果を書き加えたもの。回答者数と共に，パーセンテージを記入した。４段階または５段階の評定尺度上に記入した数値は，回答者数の分布を示す。記述式の回答項目については，すべての回答を〔　〕内に記入した。

回答者数が少ない事から，クロス分析の傾向を読み取ることが困難であるため，全体の記述に重点を置いた。今後同様の趣旨の調査を行う際に，この調査で使用された質問項目が参照されるならば幸いである。　　（松本）

発送数 91
返送数 33
回収率 36.7%

「現代社会」の現状についての実態調査

筑社学事務局
1986.12.24

拝啓、1986年も残すところあと数日となりましたが、今年は社会科教育をめぐってさまざまな論議が沸騰した年でもありました。特に教育課程審議会の「中間まとめ」は、「現代社会」の選択制への移行の方向を打ちだし、私たちの新たな対応をせまっています。そこで、今回は、先生方が「現代社会」をどのようなお考えで、どのように実践されているかをお聞きして、今後の「現代社会」のあり方を考えるための資料にしたいと思っております。次回の大会［２月１１日（水）］におけるシンポジウムの検討資料にもなりますので、よろしくお願いいたします。尚、誠に勝手ながら、1月10日迄に御返送下さるようお願いいたします。

Q１．あなたは「現代社会」を担当したことがありますか。
　１．はい　２．いいえ
　31(94%)　2(6%)

Q２．貴校で「現代社会」を担当されている先生は他にどの科目を担当されていますか。担当するものすべてに○をつけて下さい。
　１．地理 24(73%)　２．日本史 20(61%)　３．世界史 16(48%)　４．倫理 15(45%)　５．政・経 21(64%)
　６．その他［　雑学例は　］ 1(3%)

Q３．貴校の社会科の教育課程について、下記の表に該当する事柄をお書き下さい。

		現代社会	地理	日本史	世界史	倫理	政治経済
1年	単位数						
	クラス数						
	履修方法	必・選	必・選	必・選	必・選	必・選	必・選
	担当教師のべ人数						
2年	単位数						
	クラス数						
	履修方法	必・選	必・選	必・選	必・選	必・選	必・選
	担当教師のべ人数						
3年	単位数						
	クラス数						
	履修方法	必・選	必・選	必・選	必・選	必・選	必・選
	担当教師のべ人数						

1

注）履修方法の欄の［必］には、学校選択で生徒に必ず履修させているものもふくめて下さい。

Q４．貴校の「現代社会」の履修の形態は、次のうちのどれに近いでしょうか。
　１．これまでの科目の分類では取りあげにくかった題材を中心に授業をしている。 5(15%)
　２．「現代社会」の教科書の内容に沿って授業をしている。 7(52%)
　３．「現代社会」を置いてはいるが、実質的には「倫理」・「政・経」をやっているに等しい。 3(9%)
　４．「現代社会」を読み換えて、他の科目を置いている。 4(12%)
　　科目名［「現代社会」２単位＋「世界史」２単位／「現代社会」２単位＋「日本史」２単位／「倫理」＋「地理」］
　５．その他［
　・担当教師により種々。
　・担当教師によってかなり内容に相違がある。「文化」等を進んで取り上げる者もあるが、大概「倫理」「政・経」に重きを置いている。
　・担当教師により種々。教科書どうりもあれば、一つのテーマを掘り下げる人もいる。
　・現代社会の特質に触れたあと、「政・経」の中の政治分野について、特に憲法学習を中心にして、教科書以外の資料を用いて授業を行なっている。また２年での「政・経」では経済的分野を中心として授業を行なっている。］

SQ４－１．Q４で３、４と答えられた先生にお聞きします。その理由を次の選択肢から選んで下さい。
　１．入学試験や就職試験への対応のため。 4(67%)
　２．「現代社会」の内容は「倫理」「政・経」とほぼ同じであり「倫理」「政・経」と置き換えても同じ効果があると思うから。 1(17%)
　３．「現代社会」の趣旨に納得できないから。
　４．その他 1(17%)
　　他［
　・「政・経」「倫理」を３年次で取ることのできる生徒が少ないから。
　・２年次の世界史」の単位不足。］

SQ４－２．貴校で「現代社会」が実質的におこなわれなくなったのはいつからですか。
　１．昭和53年度版学習指導要領が施行された時から。 1(17%)
　２．それより後から（昭和　　年度から） 5(83%)

2

Q5．「現代社会」の各項目についてお聞きします。次の各質問に該当するものすべてに○を御記入下さい。尚、下記の項目は学習指導要領によっています。

SQ5－1．年間指導計画上、先生が特に重点を置かれている項目。
SQ5－2．年間指導計画上、省略または軽く触れる程度にせざるを得ないと思われている項目。
SQ5－3．生徒が良く関心を示す項目。
SQ5－4．生徒が低い関心しか示さない項目。
SQ5－5．「現代社会」を2単位ずつ分けて履修させている場合、先生が担当されている項目。（該当する方だけお書き下さい。）

項目（学習指導要領による） ＼ 質問	S-1. 特に重点を置く	S-2. 軽く触れる程度にせざるを得ない項目	S-3. 生徒が良く関心を示す項目	S-4. 低い関心しか示さない項目	S-5. 当の単位分のみ担当	備考
1．現代社会と人間生活	8	8	6	6	5	
2．人類と環境	16	5	14	1	4	
3．人口問題と資源エネルギー	18	4	17	0	4	
4．科学技術の発達と現代の経済生活	7	6	3	11	4	
5．日本経済の特質と国際化	12	5	3	12	4	
6．経済の調和ある発展と福祉実現	13	5	3	11	4	
7．日本国憲法と国民生活	21	1	9	9	5	
8．民主政治	10	5	2	12	4	
9．国際平和	12	3	6	8	4	
10．世界の文化	6	11	9	5	2	
11．日本の文化と伝統	5	11	8	4	2	
12．現代の文化	6	12	5	4	2	
13．現代青年の諸問題	12	8	21	1	4	
14．適応と個性	7	9	5	5	3	
15．真理を求めて思索することの意義	7	11	2	13	3	
16．よく生きることと生きがいの追求	5	12	1	13	3	
17．民主社会の倫理	6	11	2	10	3	

数値は○印の実数

3

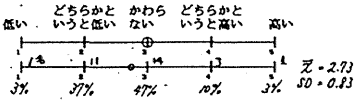
Q6．「現代社会」で先生がとられている授業の形態についてお聞きします。全体を10とした場合の比率を、記入例にしたがってお答え下さい。

	記入例	記入欄
1．講義中心の授業	8	74.6 %
2．発表・討論・作業（個人・グループとも）中心の授業	0	13.5 %
3．視聴覚教材（ビデオ・スライドなど）中心の授業	2	10.9 %
4．その他［　解答例なし　］	1	1.0 %

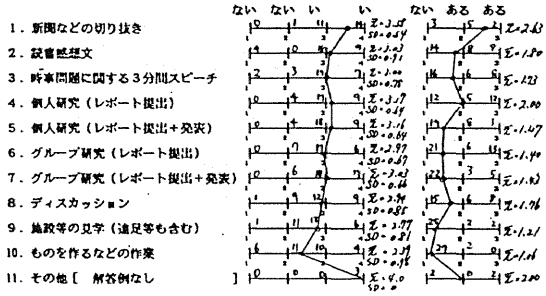
数値は平均値

SQ6－1．「現代社会」の授業において、講義の占める比重は他科目と比べてどうですか。該当するところに○をつけて下さい。

［記入例］

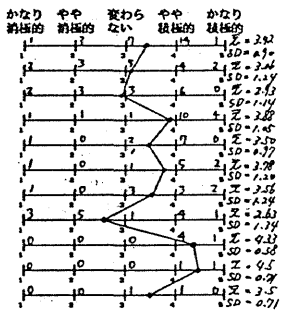


Q7．「現代社会」の指導上（授業の内外を問わず）さまざまな工夫が考えられますが、次の事項について、①先生はどのように考え、②また実践されていますか。該当するところに○をつけて下さい。



4

Q8．Q7－②で［一回ある］［数回ある］と答えられた先生にお聞きします。お答えいただいた指導上の実践に対して、生徒は、講義形式の授業に比べてどのような反応を示しますか。該当するところに○をつけて下さい。



Q9．先生が授業で使用されている教材についてお聞きします。該当する選択肢すべてに○をつけて下さい。

SQ9－1．生徒に持たせている市販のもの。
1．教科書（出版社　　書名　　）30（91%）

出版社名	教科書名	数	出版社名	教科書名	数
第一学習社	新訂現代社会	2	清水書院	高等学校現代社会	2
〃	改訂現代社会	2	〃	新現代社会	3
実教出版	現代社会	2	帝国書院	現代社会	1
教育出版	新訂現代社会	1	東京書籍	改訂現代社会	6
一橋出版	新現代社会	2	自由書房	改訂版現代社会	3
〃	高校現代社会	1	〃	新現代社会	1
東学	現代社会	1	数研出版	現代社会	1

5

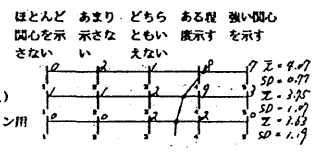
2．「現代社会」用資料集 22（67%）
3．サブノート 6（18%）
4．用語集 2（6%）
5．統計資料集 0（0%）
6．その他［　地図帳（1）、倫理資料集（1）　］2（6%）

SQ9－2．先生がお作りになって生徒に配布するもの。
1．教科書に沿った（教科書の補助として用いる）プリント 16（48%）
2．教科書の記述を離れた自主教材プリント 22（67%）
3．その他［　解答例なし　］0（0%）

SQ9－3．先生が授業で使用される視聴覚教材。
1．ビデオ（市販のソフト）3（9%）
2．ビデオ（TVからのコピー）21（64%）
3．ビデオ（自作）1（3%）
4．スライド（市販のもの）6（18%）
5．スライド（自作）2（6%）
6．TP 0（0%）
7．その他［県のライブラリーの16mm・映画（16mm）・自作のテープ］6（18%）

Q10．「現代社会」の中で時事問題をどのように扱っていますか。該当する選択肢すべてに○をつけて下さい。
1．授業の導入用に使用 26（79%）
2．レポート・宿題用（個人）に使用 15（45%）
3．授業でのディスカッション用に使用 7（21%）
4．生徒のグループ研究用に使用 2（6%）
5．ほとんど使わない 1（3%）

SQ10－1．Q10で1～4と答えられた先生にお聞きします。生徒はどの程度関心を示しますか。該当するところに○をつけて下さい。



6

4．生徒のグループ研究用　　Z＝1.5　SD＝0.58

SQ10－2．時事問題の扱い方として、特に良いものがありましたらお書き下さい。

・一つのテーマを、ある程度時間をかけて新聞等で調べさせて、レポートの提出・発表をさせる。
・チェルノブイリ原発事故・スペースシャトル爆発事故等で、環境破壊や宇宙開発と平和について考えさせる。
・指導内容と関連ある問題点を新聞などで事例として提示している。
・事実がダレたときの世間話。
・教養問題としてクイズ形式にする。
・特にディレンマを感じさせるもの、賛否両論を提示し、考えさせることのできるもの。

Q11．ディスカッションについてお聞きします。「現代社会」の授業の中にディスカッション（3分間スピーチ等に伴うものを含む）をどのくらい取り入れていますか。該当する選択肢ひとつに○をつけて下さい。

1．年（140時間）に1～2回程度　6（21%）
2．半年（70時間）に1～2回程度　2（7%）
3．月（18時間）に1～2回程度　5（17%）
4．週（4時間）に1～2回以上　2（7%）
5．ほとんど取り入れていない　14（48%）

SQ11－1．Q11で1～4の場合、1回あたりのディスカッションにどのくらいの時間をかけますか。該当する選択肢ひとつに○をつけて下さい。

1．10分未満　8（33%）　2．10分以上20分未満　4（17%）
3．20分以上30分未満　3（20%）　4．30分以上1単位時間未満　2（13%）
5．1単位時間以上　1（7%）

SQ11－2．Q11で1～4の場合、一般的に言ってディスカッションに関心を示す生徒はどのくらいいますか。

ほとんどいない　1／4くらい　半数ぐらい　3／4くらい　大部分が示す　　Z＝3.14　SD＝0.59

SQ11－3．印象に残るディスカッションのテーマがあれば、挙げて下さい。

7

・環境破壊・経済活動と自分たちの生活
・国際平和について
・核と平和
・恋と愛・愛と誠・義務と責任
・老人問題・貧と富
・専守防衛か非武装中立か
・国際青年の意識をみて自由に討論・新しい人権にはどのようなものが必要か・戦争はなぜおこるのか、また今後はどうか・生命について（予定）
・戦争の原因
・障害児の命・ＦＦ現象と大衆文化

Q12．1年間を通した評価はどのような比率で考慮されていますか。全体を100とした場合のだいたいの比率を御記入下さい。

	記入例	記入欄
1．定期考査	70	75.1 %
2．小テスト	10	1.0 %
3．レポート	0	11.1 %
4．発表・発言	0	2.0 %
5．ノート	10	3.6 %
6．授業態度	10	3.8 %
7．その他［　　］	0	1.4 %

数値は平均値

小テスト　10点
出席点　20点

Q13．「現代社会」の場合、次の各項目は評価の際に他科目に比べて比重がどのようになっていますか。該当するところに○をつけてください。

	軽い	やや軽い	同じ	やや重い	重い	
1．定期考査の比重						Z＝2.71　SD＝0.55
2．小テストの比重						Z＝2.70　SD＝0.77
3．レポートの比重						Z＝3.03　SD＝0.84
4．発表・発言の比重						Z＝2.30　SD＝0.91
5．ノートの比重						Z＝2.96　SD＝0.87
6．授業態度の比重						Z＝3.12　SD＝0.33
7．その他の比重						Z＝3　SD＝0

8

Q14．レポートを書かせる場合についてお聞きします。

SQ14－1．教師側が設定するテーマについて、代表的なものを挙げて下さい。

・新聞切り抜きを使った時事問題・具体的な基本的人権について・選挙と政党
・身近な公害・国際人について
・父母の戦争史・私の恋愛論
・読書感想文
・公害・福祉・生活文化
・自分史・愛について・戦争と平和
・身近な環境問題・ＣＭ批評
・平和問題・憲法に関すること
・食糧問題・資源エネルギー問題・核兵器と平和
・第9条と自衛隊・自分の恋愛体験
・高校に入学して・青年期と自分・これからどのように生きるか
・第9条について・差別について・代替エネルギーについて
・原子力問題・税金・損害保険・科学と人間・10年後の私・旅
・青年文化について・国際問題について・現代社会の諸問題について
・身近な地域の文化・世界の諸地域の一地域について・哲学の本について
・在日朝鮮人について・「エスキモーは野蛮か」について・自由に投書しよう
・地域の伝統文化

SQ14－2．生徒が自由題で書いたテーマについて、印象に残るものがあればお書き下さい。

・旅・まんじゅうと日本人（日本の伝統文化）・針供養
・アジアと日本の理解・針供養

※　支障がなければ、先生のお作りになった「現代社会」の定期考査の問題を送って下さい。

Q15．「現代社会」の年間指導計画作成にあたり、どのように取りくんでおられますか。該当する選択肢ひとつに○をつけて下さい。

ア．自分で独自に作成する。12（43%）
イ．「現代社会」の他の担当者と話し合って決める。14（50%）
ウ．教科会等で社会科全員が参加して決める。2（7%）
エ．その他［　解答例なし　］

9

Q16．「現代社会」に関して、他の担当者とどのような協力体制をとっておられますか。該当するところに○をつけて下さい。

	ほとんどしていない	たまにしている	ある程度している	よくしている	
1．共同の自主教材作成					Z＝1.37　SD＝0.77
2．相互の授業公開					Z＝1.17　SD＝0.38
3．学習会（授業内容に関するミーティングを含む）					Z＝1.37　SD＝0.62
4．資料の相互提供					Z＝2.00　SD＝0.87
5．その他［　解答例なし　］					Z＝1.00　SD＝0

SQ16－1．Q16の1・2・3のすべてで［ほとんどしていない］または［たまにしている］と解答した方にお聞きします。その主たる理由は何ですか。該当する選択肢すべてに○をつけて下さい。

1．（話題にはなるが）校務が多忙で時間的余裕がない。17（53%）
2．（話題にはなるが）他の受験科目に重点を置かざるを得ないから。7（21%）
3．他の科目についてはしているが、「現代社会」にまで手がまわらないから。　0（0%）
4．もともと「現代社会」の趣旨に賛同できないから。1（3%）
5．その他　10（30%）

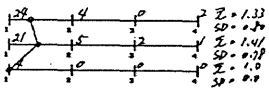
・各自個性的におこなっているので。
・各自勝手なことをしているので他人の内容に干渉しない。
・皆で協力する雰囲気がない。
・その習慣がない。
・各自の扱う領域が異なるため。
・各自に教授権が分散しているから。
・私以外の人は「現代社会」に否定的。

Q17．「現代社会」に関して、他校の先生方とどのような協力体制をとっていますか。該当するところに○をつけて下さい。

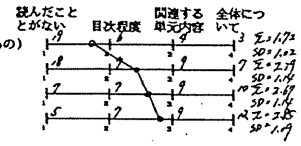
	ほとんどしていない	たまにしている	ある程度している	よくしている
1．共同の自主教材作成				Z＝1.00　SD＝0
2．相互の授業公開				Z＝1.17　SD＝0.46

10

3．学習会
4．資料の相互提供
5．その他［　解答例なし　］

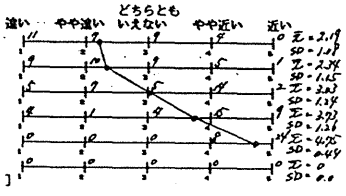


Q17．小・中学校の教科書の内容についてどのくらい御存知ですか。該当するところに○をつけて下さい。



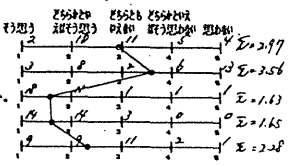
1．小学校（最低ひとつの学年のもの）
2．中学校（地理的分野のもの）
3．中学校（歴史的分野のもの）
4．中学校（公民的分野のもの）

Q18．現在貴校で実践されている「現代社会」は、以下のそれぞれの科目の内容にどのくらい近いとお考えですか。該当するところに○をつけて下さい。



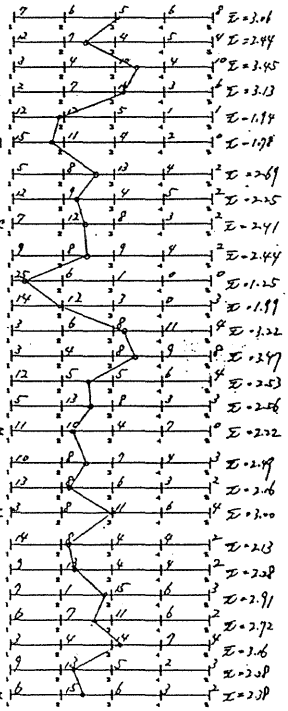
1．日本史
2．世界史
3．地理
4．倫理
5．政治・経済
6．その他
［　解答例なし　］

Q19．「現代社会」に対する現状評価として代表的なものを以下に挙げます。それぞれの評価に対する先生のお考えに近いものに○をつけて下さい。



1．生徒が意欲的に参加する。
2．内容にゆとりがある。
3．科目のねらいが周知徹底していない。
4．教材・方法についての工夫が可能。
5．受験には役立たない。

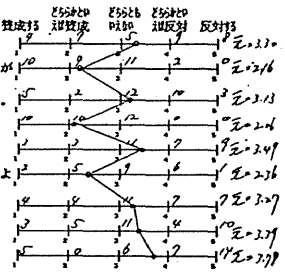
6．科目としての個性がない。
7．学習の評価がむずかしい。
8．指導しやすい科目である。
9．生徒の行動・態度に変化がみられる。
10．教師の力量が不足している。
11．小中学校の社会科学習の「総まとめ」になっていない。
12．方法論の訓練にはなる。
13．科目のねらいが不明確である。
14．生徒のものの見方をきたえることができる。
15．将来きっと役にたつ。
16．指導内容は教師によって多様である。
17．科目としてのまとまりに欠ける。
18．生徒にやる気がない。
19．基本的な知識が身につかない。
20．教材研究がむずかしい。
21．生徒の知識をふやすことができる。
22．選択科目への「導入」にはなっていない。
23．生徒の問題意識が稀薄である。
24．教えるべきことが多すぎる。
25．生徒が人間について深く考えるようになる。
26．内容の精選がむずかしい。
27．生徒の実態に応じた指導ができる。
28．1年次に置くことには問題がある。
29．実際の指導内容は画一化している。
30．生徒のものの見方は変わらない。
31．他の科目よりも実践に面白味がある。
32．生徒が社会問題に関心を持つようになる。



SQ19－1．その他、とくに「現代社会」に対する現状評価がございましたらお書きください。

・評価が最大の問題、5段階をつけなくてもよいなら、もっと自由に工夫できる。
・実践の仕方によっては、生徒に社会認識の基礎を身につけさせられる非常に有効な科目になりうると思う。そのために教材研究と生徒実態の正しい把握が不可欠。
・受験が絡んでくると「現代社会」のねらいも生かされなくなる。
・科目そのものの正当な評価はしにくいが、現代の高校生の社会科に対する姿勢の中ではやりにくい。
・教師の力量の格差が他教科に比べ大きくなると思う。
・いわゆる「普通」の高校で履修させるには別にそれほどの問題はないが、いわゆる「底辺校」での実践は、他の科目でも同じであるが非常に困難である。
・現在の指導要領の内容通り授業を構成することは不可能であり、意味を持たないと思う。小・中・高のカリキュラムの中に体系化されて位置付けられていない。
・特にその内容に科目としての特色がほしい。
・現場で「裁量」の余地がある唯一の科目である。
・進学を主たる目標にしている生徒が多い学校にとっては「お荷物」以外の何物でもない、廃止すべき科目である。「現代社会」を必修にした方々の目論見はもろくもくずれさったのでは？現場の実態を知らぬ教育官僚の机上論にすぎない。
・科目としてのねらいとまとまりにかけ、1年次に教えることにも問題がある
・地理的分野の充実が望まれる。
・文部省からの科目の趣旨のＰＲが不足。各担当者が勝手に実践している。
「政・経」「倫理」の担当者が現実には担当なので、地理と文化の事項が弱くなっている。
・「現代社会」は、今、そしてこれから様々なすばらしい実践が出てくるはずである。今の時点でこの科目を選択にするのは時期が早すぎる。
・文部省の示した「現代社会」は、のりとはさみで基礎知識のつめこみ。「現代社会」は初期社会科のように問題単元にして、思考力育成をねらいにした方がよい。
・教師の側がしっかりと問題意識・広い視野を持ち徹底した教材研究をしておけば、こんなにおもしろく、また生徒ものってくる科目はないと思う。
・教師の力量不足が最大の原因。社会科学問や人生経験が特に不足している。
・内容に一貫性がなく、焦点がぼやけてしまう。科目の趣旨には賛成だが、教科書の構成を再考してほしい。共同で担当しているので、教科書に沿った形での授業しかできない状況にある。結局暗記中心の評価になってしまう。

Q20．今後の「現代社会」のあり方について、以下にいくつかの考えを挙げます。それぞれに対して、先生のお考えに近いものに○をつけて下さい。



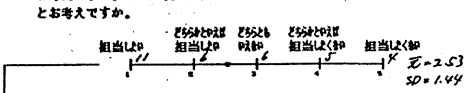
1．しばらくは現状のままでよい。
2．学習指導要領の内容を検討したほうがよい。
3．2・3年次に履修させたほうがよい。
4．内容を精選したほうがよい。
5．履修単位数を減らしたほうがいい。
6．他の科目と内容を重複させない方がよい。
7．選択科目にした方がよい。
8．大学入試科目にした方がよい。
9．廃止した方がよい。

SQ20－1．その他、教育課程審議会の打ちだした「現代社会」の選択科目化の方向等、教育行政のあり方全般について、御意見がありましたらお書き下さい。

・小・中・高の社会科の総まとめとして、3年次に置くべきではないか。
・「現代社会」に対する教師集団の取り組みに問題がある。
・「現代社会」も選択が望ましい。
・朝令暮改、政治的にすぎる。
・選択とした場合、他科目とは平等に扱われないという危機感を持つ。
・選択科目化の方向に流れたとしても、結局のところ教師の力量が一番現われてくる科目ではないかと思う。
・短期間で改訂されすぎる。「現代社会」についても単に、選択にすることによって問題が解決するとは思わない。また、選択「現代社会」では、本来の趣旨とは異なってしまうのでは。（内容的に新しいものに換えていくのでなければ）
・教育現場の実状をよく理解した上で、すべてを検討してほしい。
・教育のあり方を定期的な教育過程の変更でかえていたら、結局に追うだけである。教師の世界観・人生観に一貫性があればよいと思う。
・教育行政に携わる者と、教育現場にいる者との意志の疎通がほとんどない。もっと現場の声に耳を傾けてほしい。
・2年次で歴史を教えるとき、基本的な都市・山・河等、果ては国の名前がまるで生徒の方では理解されていない。こういう様な現場があるということをわ

かった上で話し合いがなされているのだろうか。
・方針に一貫性がない。
・現場の意向を無視した安易な上からの改悪には反対。
・教育過程のサイクルが短すぎ、現場が混乱している。
・「現代社会」を学年指定しない必修にするべきと思う。また、全学年で学習するのもよいと思う。「現代社会」はもっと強力的にすべきと思う。
・教育現場の声を無視したもので大変残念に思う。何故教育行政は"じっくり育てる"ということを理解できないのか。
・現場教師に朝令暮改的なあり方は深い不信感をうえつける。導入の際の指導は一体何だったのか。
・生徒にはかなり人気があると思う。しかし教科書の構成上の問題と担当教師間の事情で、テストは結局教科書記述の暗記が中心となってしまい、私も生徒もディレンマを感じながらやっている。生徒の中にも必修として教すべきという意見が多くあり、教育行政一般に対する不信（大学も含めて）がかなり強くなっている。

Q21. 現在「現代社会」を担当されておられる先生は、次年度も引き続いて担当したいとお考えですか。また、現在は担当されておられない先生も機会があれば担当したいとお考えですか。



SQ21－1．よろしかったら、その理由をお聞かせ下さい。

SQ21－1－1「現代社会」を担当したい理由。

・教材が選にはまらず自由に展開できて面白い。受験校でない学校にとってはこういう科目の方が生徒に現代社会を教えることができると思う。
・まだ教えたことがないので。
・以前担当していて、かなり自由な構成で授業できたから。他の科目のような固定されたものとは内容的に違って教師自身の考えにもとづいて構成できると思う。
・やりがいがあります。
・1年目ということで暗中模索だったので。もっと精選した形でやってみたい
・まだ5年目の実践では試行錯誤の域を出ていない。政・経分野の教材研究にもある程度ゆとりがでてきて、これからがスタートであり、時間をかけて完成していきたい。

・授業の展開に工夫の余地が大きいため。
・担当することになっている。
・教師側がしっかりとした問題意識・広い視野・徹底した教材研究をしておけば、こんなにおもしろく、また生徒ものってくる科目はない。
・教材研究にかなり自由裁量の余地がある。

SQ20－1－2「現代社会」をどちらかといえば担当したい理由

・2・3年次の選択科目と関連があるので。
・生きた教材を使って、生徒が反応しやすい。教材研究のやりがいがある。
・自分の専門と近いから。
・意欲を持たせるような科目である。

SQ20－1－3どちらともいえない理由

・科目担当は教師の専門制だけでなく、学年担当（特に担任）に依存する。したがって、何を担当するのか自分の意志通りにならない場合が多い。

SQ20－1－4「現代社会」をどちらかというと担当したくない理由

・内容が多様で生徒の興味関心を増大させるのには無点ぼけすることが多いから。
・力がともなわない。
・「現代社会」の科目の内容性に一貫性が乏しい。性格がはっきりしない。
・取り扱う範囲が膨大にすぎる。

SQ20－1－5「現代社会」を担当したくない理由

・内容の精選の問題など。
・進学校にはお荷物
・学校も生徒も他の先生方も必要性を感じていない。受験に必要ない科目はジャマもの扱いされている。教師自身がいい授業と考えても、学校・生徒が「いい」と判断してくれるとは限らない。そういう中で自分の好きなように実践できないくらいなら、担当しない方がいい。

Q22. 学校の仕事（家庭に持ち帰るものも含む）のうち、教科指導以外の仕事の量はどのくらいになりますか。教科指導のために費やす仕事量を5としたときの以下のそれぞれの仕事量を御記入下さい。

仕　事	教科指導	生活指導	進路指導	部活指導	その他（事務・雑務）
仕事量	5				

平均　30.1%　20.4%　13.5%　17.6%　18.3%

SQ22－1．上記の各項目について、お悩みの点がありましたらお聞かせ下さい。

・本校は生徒指導（進学・部活）にとても時間がかかるので、教材研究が手薄になることがあって・・・。
・生徒指導に関して、授業成立以前の問題も多く、どうしても生活指導に費やす時間がとられがち。教科指導と生活指導をどのように有機的に結びつけるかが今後の課題である。
・本校は教科指導より生活指導の方が大変であり、実際の教科指導の内容は中学レベルであろう。
・とにかく雑務が多く、校務分掌の関係（生徒会）で、教科指導は二の次三の次である。
・教科指導と部活指導の両立に悩んでいる。
・進路課所属で、1学年を担当しているものの、どうしても全学年特に3年生に関する仕事が多く不器用な自分が原因であるが、とても教科指導に手がまわらない。
・専任教師の率が低く、校務が負担である。
・学校の中で社会科の地位が低い。自分自身が警官と手編校教師を兼任しているような感じ。社会科教師のまとまりがない。
・現在「現代社会」と「倫理」を受け持っているが、進学校のため、実質3科目の教材研究はつらい。

「現代社会」に関する質問はこれで終りです。
最後のデータシートにも御記入下さい。

あなたについて　①教職経験年数　＿＿＿年（昭和62年3月末現在）
1～2年　8名、3～4年　8名、5～6年　10名、7年～　7名
②性別　1．男　30名　2．女　3名
③大学での専攻分野　哲学　8名、日本史　7名、世界史　3名
社会科学　12名、地理　3名
④現在の担当科目（該当する科目すべてに○をつけて下さい。）
1．現代社会　2．日本史　3．世界史
20名　13名　11名
4．地理　5．倫理　6．政治・経済
7名　6名　9名
7．その他［中学「歴史」　2名　］
⑤現在の社会科担当時間数　週＿＿＿時間　平均　16.0時間
⑥現在クラス担任をしていますか　はい（第＿＿学年）・いいえ
18(1-7,2-4,3-7)　15
⑦現在の校務分掌　教務　5名、生活指導　16名、進路指導　4名
総務　4名
⑧現在部活顧問をしていますか　はい　30名・いいえ　3名

勤務校について　⑨都道府県名　＿＿＿＿＿＿＿＿
⑩設置者　国立（3）・公立（24）・私立（6）
⑪課程　全日・定時・通信　制　普通・商業・工業・（　　）科
32　全日＋定時　1　24　その他　4
⑫生徒数　～500　4校、～1000　6校、～1500　16校
～2000　3校、～2500　2校
⑬　共学（男女比　：　）・男子・女子　校
30　1　2
⑭卒業生の進路（昭和61年3月の卒業生のだいたいの比率を）
4年制大学＿＿＿%、短大＿＿＿%、専門学校＿＿＿%
就職＿＿＿%、浪人＿＿＿%、その他＿＿＿%
進学率X（4年制大学＋短大）
20%未満　6校、20≦X＜40　4校、40≦X＜60　2校
60≦X＜80　6校、80≦X　12校

お忙しいなか、御協力大変ありがとうございました。
おそれいりますが、1月10日迄に御返送下さい。